

古 川 町 遺 跡  
第2次発掘調査報告書

2014

神戸市教育委員会



1. 1区 全景（北西から）



2. 2区 南半部（北東から）

卷頭写真図版2



1.3区 第1面全景（西から）



2.3区 浜堤上面遺物出土状況（南西から）



1. 3区 浜堤北端部生痕



2. 1区 ST101出土遺物



1.3区 浜堤上面出土遺物

## 序

古川町遺跡は、須磨区の東南部を流れる妙法寺川下流の海浜部に存在する遺跡です。

今回の調査によって、古墳時代前期から近世に至る多数の遺構や遺物を検出しました。特に調査区南端部では、浜堤（砂丘）の一部を検出し、近世以降徐々に耕作地へと開発された様子が確認でき、神戸市の海浜部の開発過程を知る重要な成果となりました。

今回の現地における発掘調査ならびに報告書刊行にご協力いただきました神戸市都市計画総局をはじめ、関係諸機関に対し、厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

神戸市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、神戸市須磨区小寺町3丁目1番において発掘調査を実施した、古川町遺跡第2次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、市営住宅建替に伴うもので、現地における調査は平成24年3月13日から平成24年9月21日の期間で実施し、神戸市教育委員会文化財課 山口 英正と阿部 功が担当した。
3. 調査地下層で検出された海浜堆積層については、同志社大学理工学部 増田富士雄教授に現地指導をいただいた。
4. 出土遺物の整理作業は、平成24年度から平成25年度にかけて、神戸市埋蔵文化財センターで実施し、文化財課 藤井太郎、山口が担当した。遺物写真の撮影は西大寺フォト 杉本和樹氏が行なった。金属製品及び自然遺物の撮影（X線撮影を含む）は、文化財課 中村大介が行なった。
5. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「須磨」、神戸市発行の2,500分の1地形図「若宮」を使用した。
6. 本書に用いた方位・座標は、平面直角座標系世界測地系で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で示した。
7. 本書の執筆は、「第2章 発掘調査の成果」の金属製品及び自然遺物の報告を中村が執筆し、「第3章 自然科学的調査の成果」については、増田富士雄氏の玉稿を賜った。この他については山口が担当し、編集を行なった。
8. 出土遺物ならびに図面・写真は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
9. 発掘調査の実施ならびに本書の刊行に際しては、神戸市都市計画総局に多大なるご協力を頂いた。記して感謝を申し上げます。

## 目 次

序	
例言	
目次	
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯と調査組織	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査組織	1
(3) 調査の経過	1
第2節 古川町遺跡の立地と歴史的環境	3
(1) 遺跡の立地	3
(2) 歴史的環境	4

第2章 発掘調査の成果	6
第1節 基本層序	6
第2節 近世以降	7
第3節 平安時代後期から中世	9
第4節 奈良時代から平安時代前期	11
第5節 古墳時代後期から飛鳥時代	15
第6節 古墳時代前期	20
第3章 神戸市古川町遺跡にみられる砂礫浜海岸の堆積物とその古地形上の位置	29
第4章 まとめ	39

## 図 版

第1図 調査区設定図	2
第2図 調査地位置図	3
第3図 周辺の主な遺跡（平成20年地形図） (S=1:25,000)	5
第4図 周辺の主な遺跡（明治18年地形図） (S=1:25,000)	5
第5図 基本層序	6
第6図 3区浜堤と生痕検出位置図	7
第7図 近世以降の遺構分布図	8
第8図 ST101平・断面図	9
第9図 平安時代後期～中世の遺構分布図	10
第10図 平安時代後期～中世の遺構出土遺物実測図	11
第11図 奈良時代～平安時代前期の遺構分布図	12
第12図 SX102平・断面図	13
第13図 奈良時代～平安時代前期の遺物実測図	13
第14図 1区掘立柱建物分布図	14
第15図 SB201平・断面図	15
第16図 古墳時代後期～飛鳥時代前期の遺構分布図	16
第17図 SB202平・断面図	18
第18図 SB202出土遺物実測図	18
第19図 SB203平・断面図	18
第20図 SB204平・断面図	19
第21図 SB205平・断面図	19
第22図 SK201平・断面図	20
第23図 SK202平・断面図	20
第24図 SK203平・断面図	20
第25図 古墳時代前期の遺構分布図	21
第26図 SK210平・断面図	22

## 目 次

第27図 土器群1 遺物出土状況平・断面図	23
第28図 土器群2 遺物出土状況平・断面図	24
第29図 古墳時代前期の遺物実測図1	25
第30図 古墳時代前期の遺物実測図2	26
第31図 古墳時代前期以前の遺物実測図	27
第32図 金属製品・金属製品製作関連遺物実測図	28
第33図 古川町遺跡の位置	29
第34図 古川町遺跡の露頭断面	31
第35図 堆積相1の前浜（礫浜）堆積物	31
第36図 堆積相1の前浜（砂浜）堆積物	31
第37図 堆積相1の前浜堆積物	33
第38図 堆積相1の前浜堆積物	33
第39図 堆積相1と堆積相2の重なり	33
第40図 堆積相2（砂丘堆積物）	33
第41図 堆積相2（砂丘堆積物）にみられる ちりめん縞状の構造	35
第42図 堆積相1と堆積相2の重なり	35
第43図 堆積相2の上部にみられる生痕	35
第44図 堆積相2にみられる液状化による変形	35
第45図 堆積物の砂の粒度特性	35
第46図 砂の粒度特性の垂直変化	35
第47図 表層地質断面	37
第48図 和田岬地域の砂嘴と潟の堆積物の分布	37

## 表目次

表1 1区掘立柱建物一覧 ..... 14

## 挿図写真目次

挿図写真1 トライヤーのウイーク ..... 2 挿図写真2 現地説明会風景 ..... 2

## 写真図版目次

卷頭写真図版1	2, 2区 SB204掘形窓出土状況（南西から）
1, 1区 全景（北西から）	
2, 2区 南半部（北東から）	
卷頭写真図版2	写真図版10
1, 3区 第1面全景（西から）	1, 2区南 全景（北東から）
2, 3区 浜堤上面遺物出土状況（南西から）	2, 2区南 全景（南西から）
卷頭写真図版3	3, 2区南 湿地内遺物出土状況（南西から）
1, 3区 浜堤北端部生痕	
2, 1区 ST101出土遺物	
卷頭写真図版4	写真図版11
1, 3区 浜堤上面出土遺物	1, 3区 第1面全景（東から）
写真図版1	2, 3区 浜堤北端部（西から）
1, 1区 全景（南東から）	
2, 1区 全景（北から）	
写真図版2	写真図版12
1, 1区 全景（東から）	1, 3区 第2面全景（南東から）
2, 1区 ST101（東から）	2, 3区 東半部（南東から）
写真図版3	写真図版13
1, 1区 SK202（北から）	1, 3区 浜堤上出土遺物（北西から）
2, 1区 SK210（南東から）	2, 3区 浜堤北端部出土遺物（南から）
写真図版4	写真図版14
1, 1区 SK201（南から）	1, 1区 ST101出土遺物
2, 1区 SK203（北から）	2, 1区 SX102出土遺物
写真図版5	写真図版15
1, 2区 全景（北西から）	1, 1区 土器群2出土遺物
2, 2区 全景（西から）	2, 1区 中世耕土出土遺物
写真図版6	写真図版16
1, 1・2区 全景（南東から）	1区 遺構出土遺物
写真図版7	写真図版17
1, 2区北半部（南から）	3区 遺構出土遺物
2, 2区 SB202（北から）	写真図版18
写真図版8	1. 蜜蠂
1, 2区 SB203（北から）	2. 土錐
2, 2区 SB203柱痕検出状況（南西から）	写真図版19
写真図版9	1. 石製品
1, 2区 SB204・205（北から）	2. 2区出土ウマ歯
	写真図版20
	1. 鉄製品
	2. 鉄製品X線透過写真

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯と調査組織

### (1) 調査に至る経緯

今回の調査は市営小寺住宅の建替工事に伴って実施した。試掘調査の結果、調査区全域で埋蔵文化財の存在が確認され、この結果を受けて都市計画総局と協議を行い、建物建設工事により埋蔵文化財が影響を受ける範囲（約2100m<sup>2</sup>）について、平成24年3月から平成24年9月21日まで発掘調査を実施した。また、平成25年度に遺物整理作業と発掘調査報告書の作成を行った。

### (2) 調査組織

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

工楽 普通 大阪府立狄山池博物館館長

和田 晴吾 立命館大学名誉教授（平成25年7月14日まで）

菱田 哲郎 京都府立大学文学部教授（平成25年7月15日から）

教育委員会事務局

平成24年度（現地調査）

教育長 水井 秀憲

社会教育部長 東野 展也

教育委員会担当部長 安達 宏二

（文化財課長事務取扱）

埋蔵文化財担当課長 千種 浩

（埋蔵文化財係長事務取扱）

文化財専門役 丸山 蘭

文化財課担当係長 丹治 康明

安田 澄

埋蔵文化財センター担当係長 斎木 嶽

事務担当学芸員 佐伯 二郎

井尻 格

中谷 正

小林さやか

調査担当学芸員 阿部 敬生

遺物整理担当学芸員 池田 穀

内藤 俊哉

藤井 太郎

阿部 功

保存科学担当学芸員 中村 大介

平成25年度（報告書作成）

雪村新之助

東野 展也

安達 宏二

（文化財課長事務取扱）

埋蔵文化財担当課長 千種 浩

（埋蔵文化財係長事務取扱）

文化財専門役 丸山 蘭

文化財課担当係長 丹治 康明

前田 佳久

斎木 嶽

西園 誠司

井尻 格

中谷 正

小林さやか

報告書作成担当学芸員 山口 英正

遺物整理担当学芸員 藤井 太郎

阿部 功

保存科学担当学芸員 中村 大介

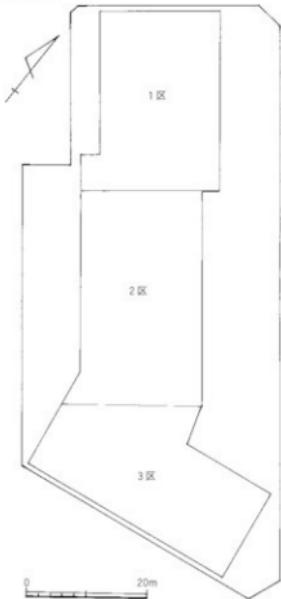
### (3) 調査の経過

調査対象地は、昭和37年から40年に建設された市営小寺住宅の敷地であり、調査前は4棟の居住棟などが存在していた。既存建物の基礎解体による埋蔵文化財の損傷を避けるため、基礎撤去については、教育委員会が文化財調査と並行して実施することとなった。

平成24年3月より、遺物包含層及び遺構面の遺存状況を確認しながら、敷地内の基礎解体撤去を開始した。調査区を3地区に分割して、北側の1区から、順次基礎撤去作業を行った。先行して実施した試掘調査により、3区は文化財の存在が希薄であること、既存建物の規模が小

さく基礎解体撤去が容易であることから、1区の調査と並行して3区の調査を実施し、3区の調査終了後、2区の調査を実施した。

平成24年5月1日より基礎解体の終了した1区の重機掘削開始。順次人力による遺構面の検出作業を行う。中世以降の耕作土より、古墳時代から平安時代の遺物が多く出土したが、遺物包含層は存在せず、直下で遺構面を検出した。6月6日に1区の全景写真撮影を実施した。5月29日から3区の重機掘削を開始。調査区の大半に浜堤が広がり、文化財の存在は希薄であった。6月18日に同志社大学増田教授の現地指導を頂き、海浜性砂堆と防砂林に伴う生痕の存在を確認した。5月31日に、兵庫県下で実施されている職場体験実習「トライやるウイーク」で、神出中学校と樺谷中学校の生徒5名、6月6日に西神中学校、井吹台中学校、太山寺中学校、雲雀ヶ丘中学校の生徒8名を受け入れた。6月25日に第1面の全景撮影を行い、図化作業を実施した。7月9日に第2面の全景撮影を行い、7月11日より、2区の重機掘削と並行して3区の埋め戻し作業を開始した。7月18日に、旧3号棟の基礎間に残されていた部分の写真撮影を実施し、順次図化を行った。7月25日に、兵庫県立六甲アイランド高校のフィールドワークの発掘調査体験で、生徒10名を受け入れた。8月25日に現地説明会を実施し、240名の来場があった。合わせて実施した発掘体験にも20名の参加があった。8月27日に古川住宅自治会12名の見学があった。8月28日に2区の全景撮影を実施し、9月5日に1区・2区の第2遺構面の全景撮影を実施した。9月4日に3区の砂堆の土層転写を実施した。9月12日に増田先生による調査地下層の堆積物の現地指導を頂き、土壤サンプルを採取した。9月21日に埋め戻しを完了し、現地調査を完了した。



第1図 調査区設定図



写真1 トライやるウイーク



写真2 現地説明会風景

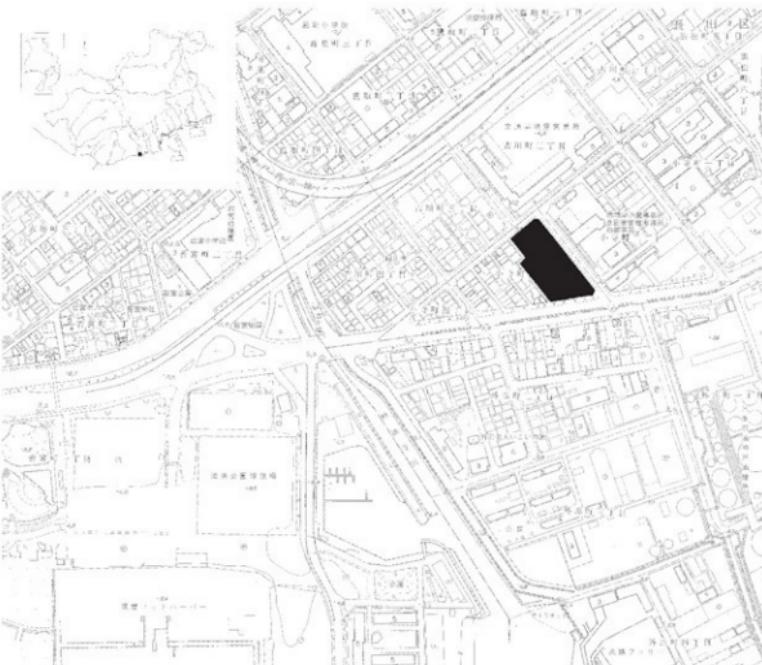
## 第2節 古川町遺跡の立地と歴史的環境

### (1) 遺跡の立地

古川町遺跡は神戸市須磨区古川町・小寺町付近に所在する遺跡である。平成17年度に実施した試掘調査で遺跡の存在が確認され、平成23年度に実施した第1次調査では、奈良時代から平安時代の掘立柱建物、溝、ピットなどが検出された。

調査地は、六甲山系から流出する妙法寺川と天井川の合流地点から南東へ600m、現在の海岸線から200mを測り、妙法寺川の最下流域に位置する。調査区内の現況地表面の標高は3.6～3.8mで、緩やかに南へ傾斜する地形である。

明治18年の地形図によると、調査地に南接して砂堆が標記されており、平野部は農地として利用されていたことが伺える。当地域は1888年（明治21）の山陽鉄道会社による山陽本線敷設以降、市街化が急速に進み、鉄道省鷹取工場（明治33年）や海浜部の石油備蓄工場などが建設され、産業面で重要な地域となる。昭和9年、須磨村の神戸市編入に伴う人口増加に備え、神戸市電が省線須磨駅まで延伸されるに至り、調査地北東に神戸市電気局（現交通局）須磨市電車庫、東隣に塵芥所（現環境局須磨事業所）等、公共施設が集まる地域となった。第2次世界大戦末期の昭和20年の空襲により付近一帯は焦土と化し、調査地内でも火災による赤変した焦土面が確認でき、焦土面直上からは、焼夷弾、鉄骨、電傘などの一部が出土した。



第2図 調査位置図

## (2) 歴史的環境

古川町遺跡周辺では、戎町遺跡・若松町東遺跡等で繩文時代晚期の遺構が検出されているが、資料数が少なく動向は不明である。戎町遺跡で弥生時代前期後半の水田や農具の未成品が検出されており、当地での農耕活動の始まりが確認できる。中期以降の集落は、戎町遺跡を中心として近接する大田町遺跡・松野遺跡等に広がり、後期にさらに集落の拡大が見られる。

弥生時代末から古墳時代前期の集落は、戎町遺跡・大田町遺跡を中心に分布が見られる。周辺部の古川町遺跡等でも、小規模な集落が形成される。古墳時代中期の集落は、2重の堀と柵で囲まれた豪族の館と考えられる遺構が検出された松野遺跡を中心に広がり、前期までの集落分布に変化が見られる。後期以降は周辺部の平野部にも集落が形成され、堅穴建物4棟が検出された鷹取町遺跡や古川町遺跡などで居住域が確認されている。また、若松町遺跡では、畑の痕跡が検出されている。

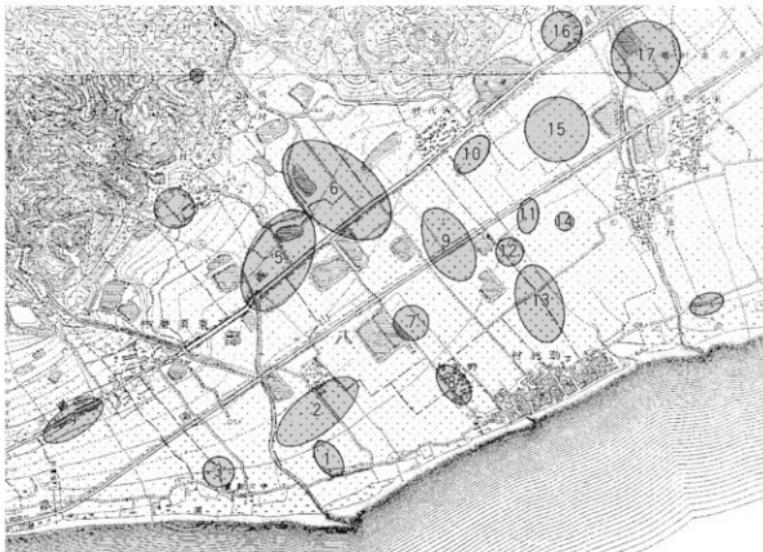
律令期に整備された旧山陽道は、古川町遺跡の北約800mの位置を東西に通る。「須磨駅家」と比定されている大田町遺跡や行幸町遺跡では、旧山陽道関連の遺構、遺物が検出されている。平安時代以降は戎町遺跡・二葉町遺跡・大橋町遺跡・古川町遺跡等で集落が検出されており、近世へ続く集落の形成が見られる。

### 主要参考文献

- 1 古川町遺跡
- 2 鷹取町遺跡 『神戸市鷹取町遺跡』1991 神戸市埋蔵文化財調査報告書  
『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』1994 神戸市教育委員会
- 3 衣掛町遺跡 『平成15年度神戸市埋蔵文化財年報』2006 神戸市教育委員会他
- 4 行幸町遺跡 『神戸市須磨区大田町遺跡』1993 神戸市埋蔵文化財調査報告書  
『大田町遺跡第2次調査』『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』1994  
神戸市教育委員会
- 5 大田町遺跡 『戎町遺跡第1次発掘調査概報』1989 神戸市教育委員会  
『戎町遺跡第15次調査』『平成8年度神戸市埋蔵文化財調査年報』1999  
神戸市教育委員会  
『戎町遺跡第35・38・50・56次調査 水野遺跡第32・33・38次調査発掘調査報告書』2005 神戸市教育委員会
- 6 戎町遺跡 『若松町遺跡』2000 神戸市教育委員会
- 7 若松町遺跡
- 8 長田野田遺跡 『長田野田遺跡第1次調査』『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』1998  
神戸市教育委員会
- 9 松野遺跡 『松野遺跡発掘調査概報』1983 神戸市教育委員会
- 10 水笠遺跡 『松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次調査発掘調査報告書』2002 神戸市教育委員会  
『水笠遺跡第26・27・28・29次発掘調査報告書』2009 神戸市教育委員会
- 11 若松町東遺跡 『若松町東遺跡』大・2・3・4・5・6次発掘調査報告書』2013 神戸市教育委員会
- 12 大橋町遺跡 『大橋町遺跡 第1次・1～6次調査発掘調査報告書』2006 神戸市教育委員会  
『大橋町遺跡第2次調査発掘調査報告書』2007 神戸市教育委員会
- 13 二葉町遺跡 『二葉町遺跡第3・5・8・9・12次調査発掘調査報告書』2001 神戸市教育委員会  
『二葉町遺跡第22次発掘調査報告書』2010 神戸市教育委員会
- 14 大橋町東遺跡 『大橋町東遺跡第1次調査』『平成20年度埋蔵文化財年報』2011 神戸市教育委員会
- 15 神楽遺跡 『神楽遺跡発掘調査報告書』1981 神戸市教育委員会
- 16 御船遺跡 『御船遺跡第2次調査』『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』2000  
神戸市教育委員会
- 17 御蔵遺跡 『御蔵遺跡第4・6・14・32次調査報告書』2001 神戸市教育委員会  
『御蔵遺跡第17・38次調査報告書』2001 神戸市教育委員会  
『御蔵遺跡 第26・37・45・51次調査』2003 神戸市教育委員会



第3図 周辺の主な遺跡（平成20年地形図）（S=1:25,000）



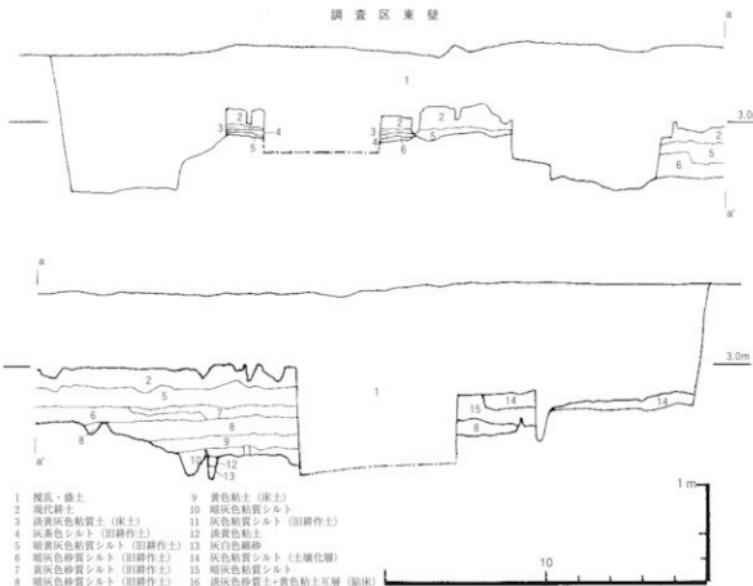
第4図 周辺の主な遺跡（明治18年地形図）（S=1:25,000）

## 第2章 発掘調査の成果

今回の調査では、古墳時代前期から近世に至る遺構、遺物を検出した。中世以降の耕作により、前時代の生活面及び遺物包含層が削平されており、調査対象遺構面は一部を除いて1面である。そのため、遺構の密度の高い地点では、層序による遺構の時期の特定は困難であった。特に遺物の出土が少なかった300基を超える柱穴については、異なる時期の遺構が重複して検出され、遺構の所属時期の確定は困難であったため、柱列の配置から建物としての縦まりを検討した。

### 第1節 基本層序

旧市営小寺住宅建設時の整地・盛土層下に、昭和20年の空襲による焼土面を確認した。その下層に近世以降の耕土層が存在する。この直下で古墳時代前期～平安時代の遺物を多く含む暗褐色シルト層を検出した。当層は中世以降の耕作土であり、各時期の遺物が混在した状態で出土した。その下層の明灰黄色シルト質極細砂層上面が遺構検出面であり、部分的に2面の遺構面が存在する。尚、調査地北半部では明灰黄色シルト質極細砂は存在せず、旧流路の堆積層である茶褐色混礫粗砂が検出されている。調査区南端部は、近世に耕地化されるまで浜堤が露出していた状況が伺え、耕土直下より古墳時代前期の遺物を検出した。浜堤及び海岸部基盤層の形成過程については、第3章の増田富士夫氏の論考を参照いただきたい。



第5図 基本層序

## 第2節 近世以降

調査区のほぼ全域で耕作土や畦畔の痕跡を検出した。近世から昭和に至るまで、主に生産域として利用されている。他に井戸6基を検出した。

### 耕作地

3区で近世以降に造成された耕作地を検出した。浜堤を整地し、黄色粘土を10cm程度の厚さに貼って保水性を持たせ、耕作地を新たに造成している。黄色粘土は調査区北半部の遺構面のベースとなっている土壤である。耕土は残されていなかったが、約180cm間隔に設けられた畦畔を10数条検出した。畦畔の方向は、ほぼ南北方向であり、直交する畦も数条検出した。

### 浜堤

耕作土直下で砂層の広がりが見られた。明治18年の地形図には、調査区の南側に砂丘の表示があり、近世以前までは、3区の大半は浜堤の広がる地形であったと考えられる。

### 生痕

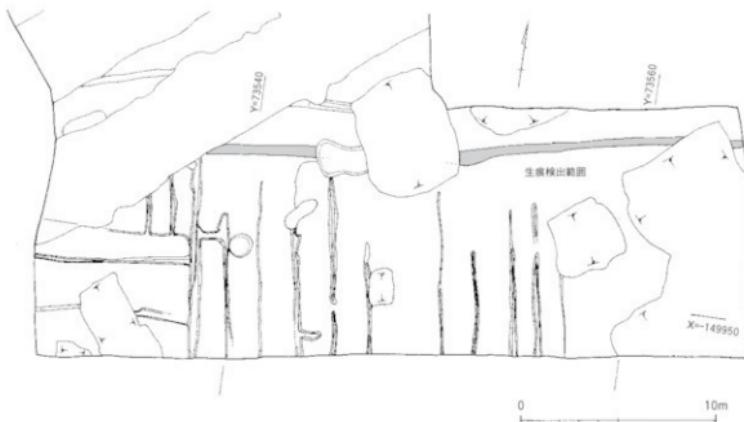
浜堤の北端部で、東西方向に並んだ樹木の根の痕跡を確認した。防砂林の痕跡と考えられ、少なくとも近世以前には存在していたと考えられる。生痕が確認されたラインから北側にのみ土壤化層が認められ、樹木の根が風による砂の移動を抑制し、山側の土壤化が進んだことを示している。

### 土坑

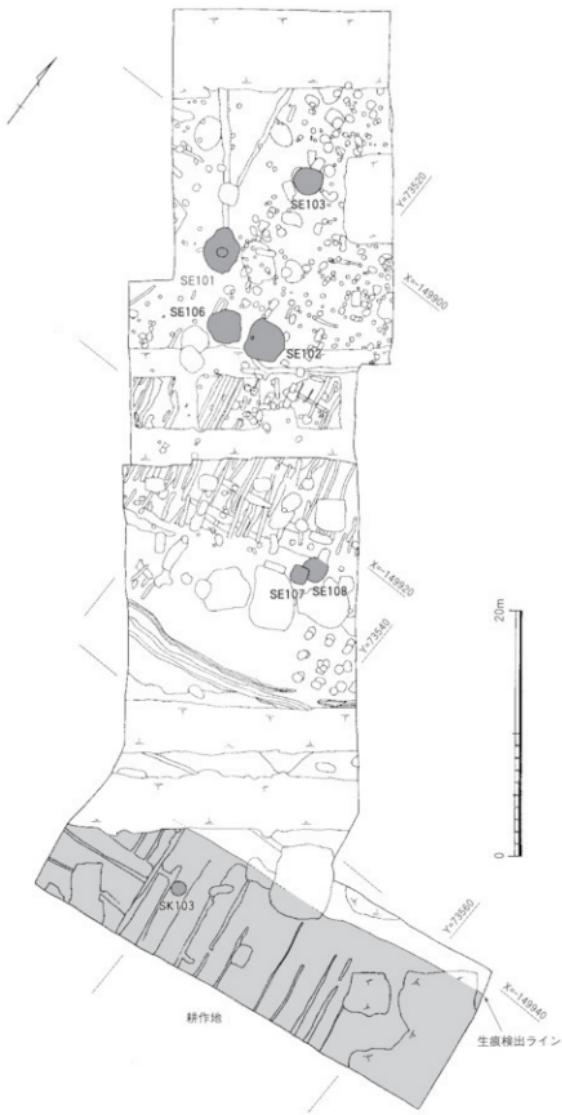
SK103は3区中央部の整地面上で検出した、直径120cm、深さ40cmの円形の土坑である。底部に直径95cmの桶の痕跡が残り、近世以降の埋桶と考えられる。遺物は出土しなかった。

### 井戸

SE101・103は井戸瓦を組んだ構造のもので、昭和期まで使用されていたと考えられる。



第6図 3区 浜堤と生痕検出位置図



第7図 近世以降の遺構分布図

### 第3節 平安時代後期から中世

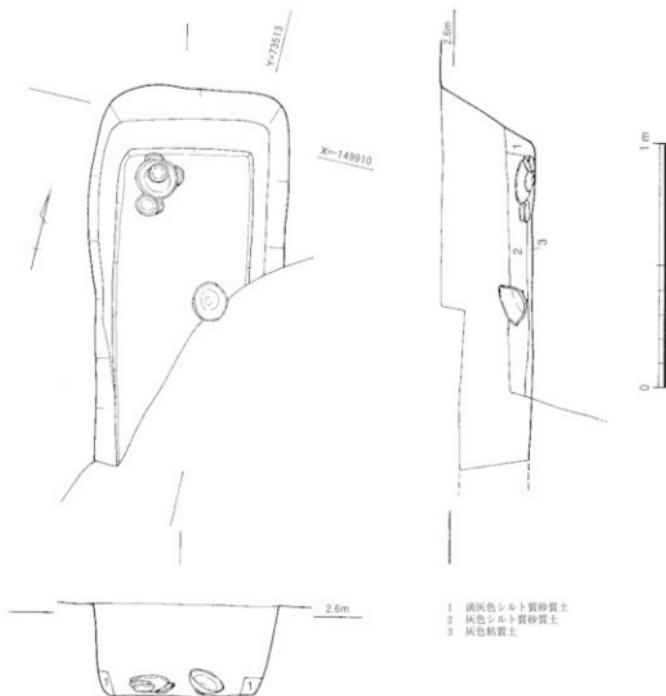
3区以外の調査区全域で遺物が出土した。検出した遺構は、耕作痕、土坑、木棺墓、溝状遺構、掘立柱建物等である。

#### 耕作溝

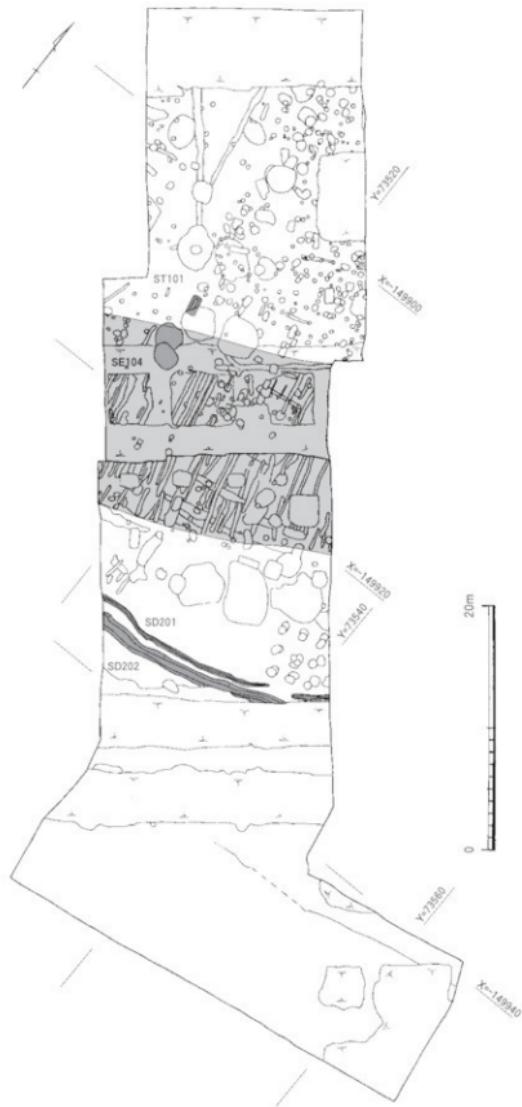
1区南端部から2区北半部で、幅15～20cm程度の溝状の耕作痕を20数条検出した。畑作に伴う畝溝と考えられ、溝の間隔が不定であることから、畝の大きさや方向が変更されていることが確認できた。いずれもほぼ南北方向に掘削されており、溝底に耕起痕が残されている例が多い。埋土より奈良時代～平安時代の遺物が少量検出されており、遺構の切り合い関係から平安時代後期以降の遺構である。

#### 木棺墓

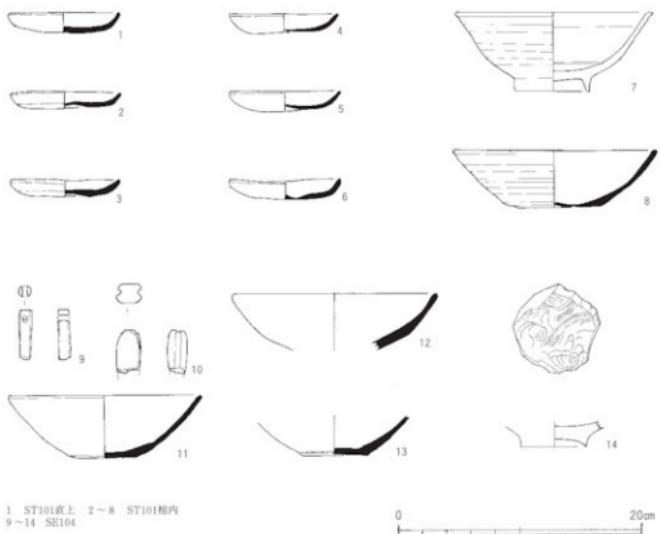
ST101は1区中央部で検出した12世紀末ごろの木棺墓である。南半部は近世の井戸の掘削により失われている。掘形の規模は、長さ160cm以上、幅80cm、検出面からの深さは38cm以上である。木棺の痕跡は、長さ75cm以上、幅30cmである。木棺北端部に、直径約30cm、厚さ約5cmの円形の石が落ち込んだ状態で検出した。遺体頭部の上方に位置し、棺外から落ち込んだ可能性がある。棺内北西隅で、棺底に接して東播系の須恵器壺1点、土師器小皿5点が重ねられた



第8図 ST101平・断面図



第9図 平安時代後期～中世の遺構分布図



第10図 平安時代後期～中世の遺構出土遺物実測図

状態で検出した。棺内中央部付近では、棺底から若干浮いた状態で白磁碗を1点検出した。

#### 井戸

SE104は1区南西部で検出した井戸で、素掘の井戸状構が埋没した後に掘削されている。掘形は長径240cm、短径200cmの規模である。井戸側の残存状況は不良であるが、木質の痕跡により、平面形は1辺約90cmの方形で、横柾縦板型の井戸側と考えられる。検出面より180cm下で、直径45cmの曲物の痕跡が検出されたが、木質は確認できなかった。井戸側内より、12世紀後半の須恵器碗、白磁碗、土錘の破片が少量出土した。

#### 溝状遺構

2区南端部で東西方向に、緩やかに弧を描いて流れる溝を2条検出した。埋土から古墳時代後期から平安時代の遺物が若干出土した。

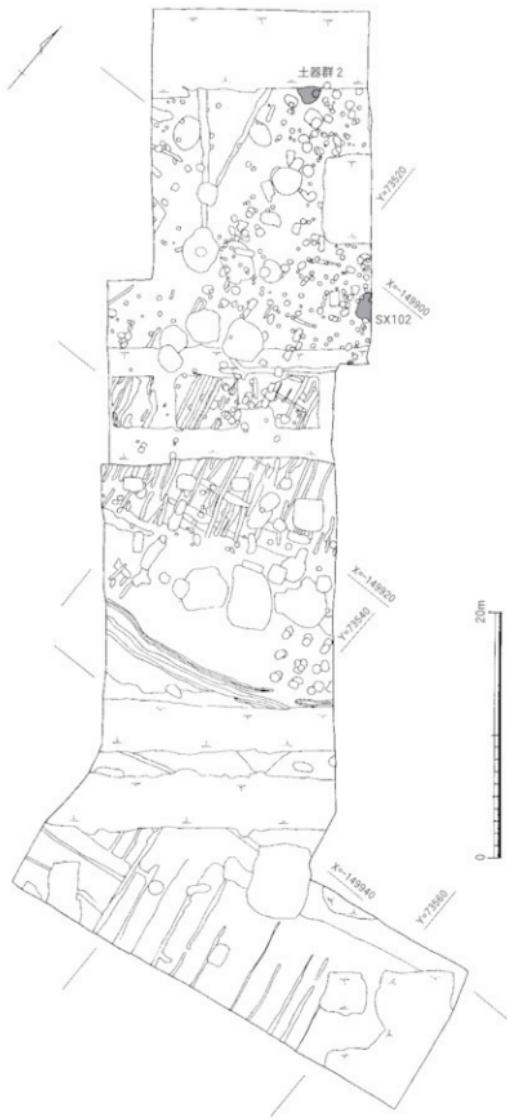
SD201は幅40～50cm、深さ約20cmの溝であり、東側で溝が約2m途切れている。SD202は幅90～120cm、深さ約40cmの溝で、SD201と平行して掘削されている。

#### 第4節 奈良時代～平安時代前期

大型の柱掘形を含む多数の柱穴と、土坑、井戸等を検出した。

#### 土坑

SX102は1区中央部の東端で検出した土坑である。東半部は調査区外であるため、形状は不明である。遺構の規模は、南北220cm、検出面からの深さは10cmである。埋土より、奈良時代後半から平安時代前期の遺物がまとめて出土した。遺構の性格は不明である。



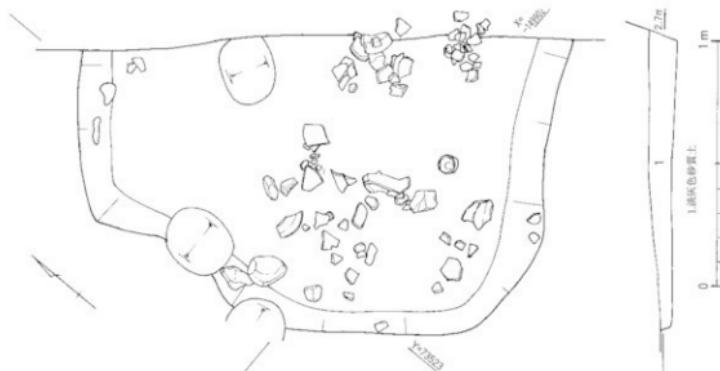
第11図 奈良時代～平安時代前期の遺構分布図

## 土器群

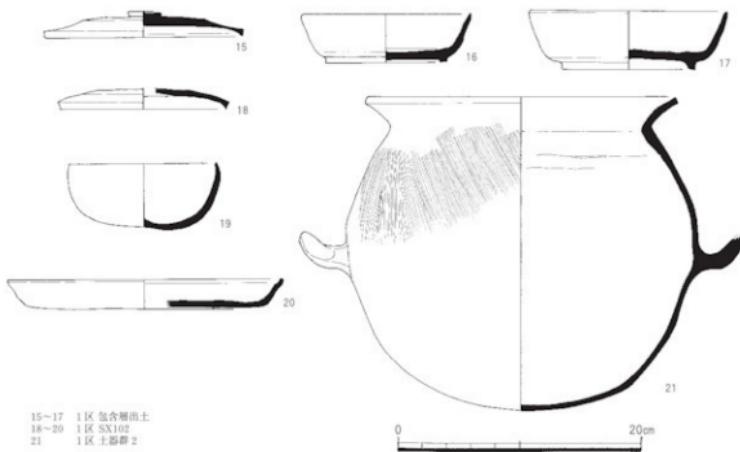
土器群2は、1区北端部で検出した土器群である。球形の胴部を持つ取手付鍋（21）が1点出土した。

### 掘立柱建物

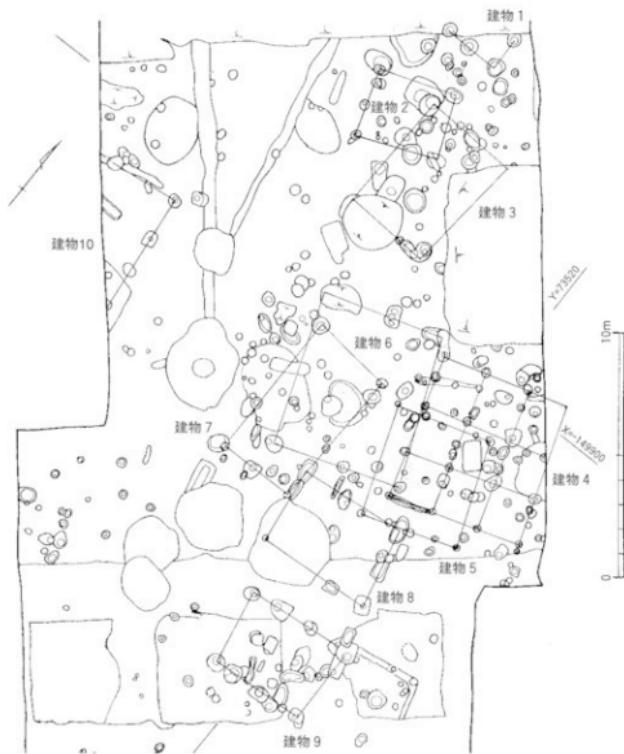
1区で検出した中世の耕作土層直下の遺構検出面で、10棟以上の掘立柱建物を検出した。同一検出面で異なる時代の柱穴が重複して検出され、また、出土遺物が少ないため時期の特定が困難であった。耕作土出土物から、古墳時代から平安時代に属すると考えられるが、詳細は不明である。規模と南北方向の柱列の方向は、表1のとおりである。



第12図 SX102平・断面図



第13図 奈良時代～平安時代前期の遺物実測図



第14図 1区掘立柱建物分布図

掘立柱建物	南北		東西		構造	方位	備考
	1間以上	1.4m以上	2間以上	2.4m以上			
掘立柱建物1	1間以上	1.4m以上	2間以上	2.4m以上	不明	N 1°W	
掘立柱建物2	2間	2.8m	2間?	3.5m?	側柱	N 23°W	
掘立柱建物3	3間	5.2m	2間以上	3.7m	側柱	N 2°E	
掘立柱建物4	3間+縁	5.3m+0.7m	3間以上	5.7m以上	縦柱	N 20°W	北側に半間の縁
掘立柱建物5	2間	4.7m	2間	4.1m	側柱	N 20°W	
掘立柱建物6	2間	6.5m	2間	5.4m	側柱	N 24°W	
掘立柱建物7	3間	6.0m	2間	3.2m	側柱	N 2°E	
掘立柱建物8	2間	3.3m	3間	4.8m	側柱	N 14°W	大型の柱断形
掘立柱建物9	2間?	3.3m	3間	4.0m	側柱	N 1°W	大型の柱断形
掘立柱建物10	3間以上	5.2m	2間以上	2.9m	側柱	N 6°W	

表1 1区掘立柱建物一覧

## 第5節 古墳時代後期から飛鳥時代

当時の遺物の出土量は、他の時期に比べて極めて少ない。陶邑編年のTK10型式以降の遺物が散見されるに過ぎず、竪穴建物、大壁建物、掘立柱建物の所属時期の特定は困難である。

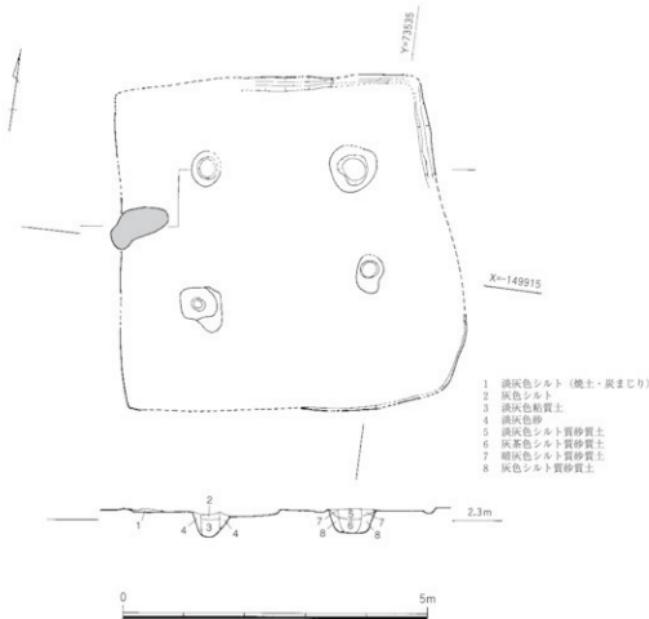
### 竪穴建物

1区南端部で竪穴建物SB201を検出した。既存の建物基礎工事の影響を受け、残存状況は不良である。床面直上まで削平されており、壁面の立ち上がりは5cm程度しか残存しない。平面形は一辺約5mの方形である。主柱穴4基、周壁溝とカマドの痕跡を検出したが、時期を特定できる遺物の出土はなかった。西壁中央部分で焼土及び炭の小片が出土し、カマドの痕跡と考えられる。また、北東隅と南東隅で、幅約15cmの周壁溝の一部を検出した。

### 掘立柱建物

SB202は2区南東部で検出した2間×2間の規模の掘立柱建物である。すべての柱の建替が行われており、隣接して柱穴が掘削されている。当初建物は、柱芯距離で東西3.4m、南北3.6mを測る。柱間は160～180cmで、南北の柱列の方向はN11°Wである。建替後の建物は、当初建物とほぼ同規模であるが、南側に約50cm移動し、棟方向はわずかに時計方向に振り、N12°Wである。柱穴埋土より、高杯脚部とタコツボが数点出土した。

建物中央部で、土坑1基と柱穴2基を検出した。土坑埋土から、焼土と炭片を少量検出した。柱穴は小型で、外周する柱穴とは規模が異なる。



第15図 SB201平・断面図



第16図 古墳時代後期～飛鳥時代前期の遺構分布図

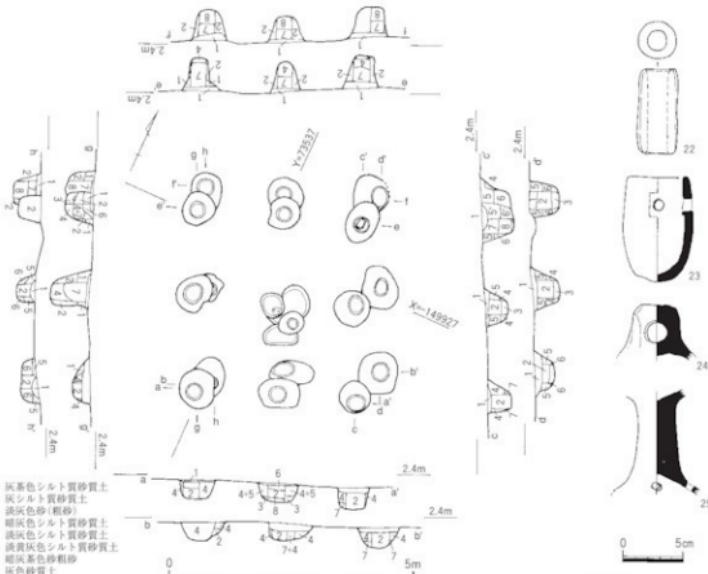
## 大壁造り建物

2区中央部で3棟の大壁造り建物を検出した。複数の柱を、同一掘形もしくは溝状の掘形に据えて柱を固定している。

SB203は3間×3間の規模の建物で、柱芯距離で東西4.1m、南北3.5mを測る。南北の柱列の方向はN1° Eである。柱掘形は6基で、平面形はいずれも長方形である。最も保存状態の良い南西の柱掘形は、短辺55cm、長辺170cm、深さ60cmを測る。柱掘形の壁面はほぼ垂直に掘削されている。掘形底部で2本の柱の痕跡が確認でき、うち1例は木質が残存していた。埋土の堆積状況から、掘形に2本の柱を据えた後、灰色粘質シルトと黄色粘土を交互に丁寧に埋めており、転圧を繰り返して柱を固定した状況が観察できた。他の柱掘形も同様の堆積状況が観察できた。柱間距離は、南北方向約120cm、東西方向約160cmである。北側から2列目の柱の内側に、外周部の柱配置と並ぶ柱穴を2基検出した。掘形規模は外周部と比べて小さいため、床を支える東柱である可能性が考えられる。時期を特定できる遺物の出土はなかった。

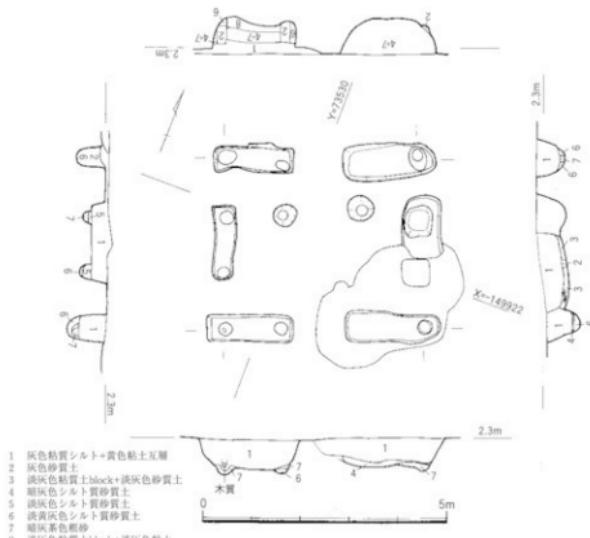
SB204は東西2間×南北3間の規模の建物で、柱芯距離で東西3.4m、南北4.0mを測る。南北の柱列の方向はN2° Eである。外周する柱の掘形は、幅約35～50cm、深さ約20～50cmの溝を巡らし、柱位置をさらに深く掘って柱を建てている。掘形の埋土は、SB203と同様に灰色粘質シルトと黄色粘土で丁寧に埋められている。柱間距離は、南北方向約120cm、東西方向約160cmである。建替が行われている柱があり、当初の長方形の掘形を切り込んで、新たに柱穴が掘削されている。また、南西部の柱穴底部から10～15cm大の礫が検出され、敷石としている。北側から3列目の柱の内側に、外周部の柱配置と並ぶ柱穴を1基検出した。規模は外周部と比べて小さいため、床を支える東柱である可能性が考えられる。時期を特定できる遺物の出土はなかった。

SB205は東西2間×南北3間の規模の建物で、柱芯距離で東西3.6m、南北3.7mを測る。南北の柱列の方向はN5° Eである。外周する柱の掘形は、幅約60～100cm、深さ約30cmの溝内で検出されたものと、独立して掘削されたものがある。掘形の埋土は灰色粘質土と黄色粘土で丁寧に埋められている。建物内に外周部の柱配置と並ぶ柱穴を2基検出した。SB202・203・204と同様、規模は外周部の柱穴と比べて浅く、床を支える東柱である可能性が考えられる。SB204と規模と方向が類似しており、同時に存在した建物である可能性が高いが、時期を特定できる遺物の出土はなかった。

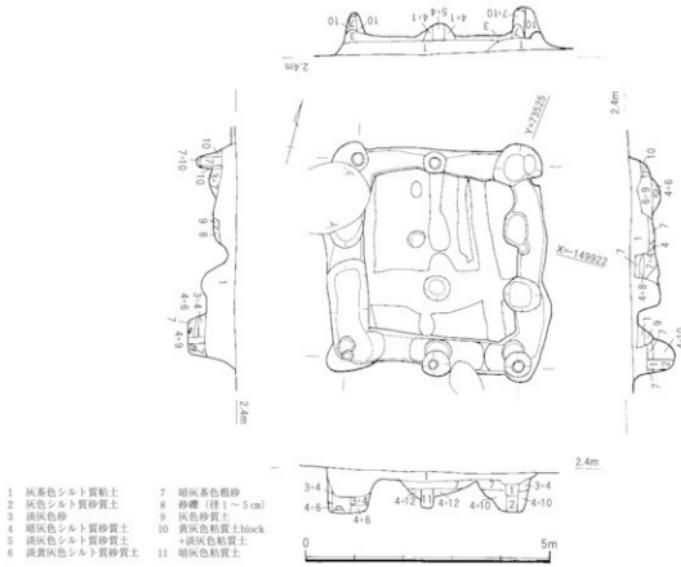


第17図 SB202平・断面図

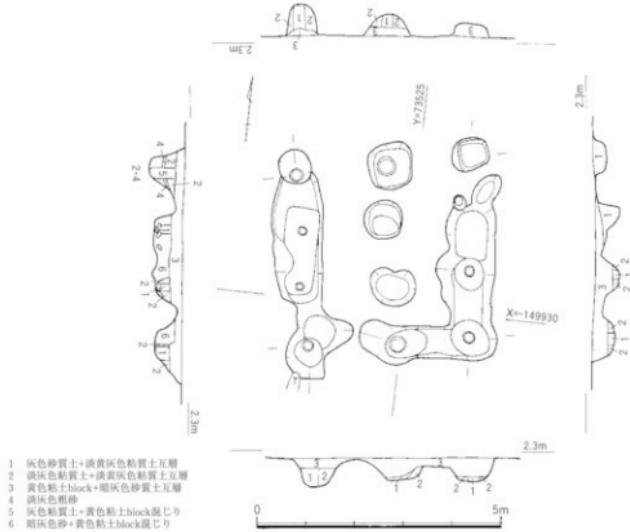
第18図  
SB202出土遺物実測図



第19図 SB203平・断面図



第20図 SB204平・断面図



第21図 SB205平・断面図

## 第6節 古墳時代前期

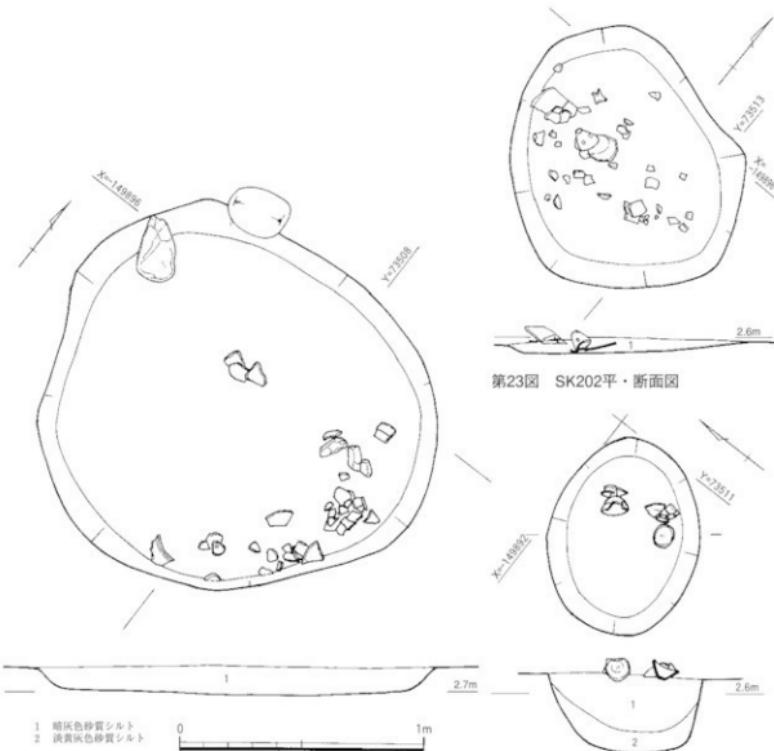
当時の遺構、遺物は調査区全域で検出した。後世の削平の影響を受け、遺構の残存状況はいずれも不良であり、土器群としたものは、本来土坑であった可能性が高い。調査区北半部の土壤化層だけでなく、南端部の浜堤上からも遺物が面的に纏まって出土していることから、当時は浜堤が露出していたと推定できる。遺物は、庄内並行期の中段階から新段階に収まる。

### 土坑

SK201は直径約160cm、深さ15cmの円形の土坑である。埋土より土師器片、土錐が出土した。

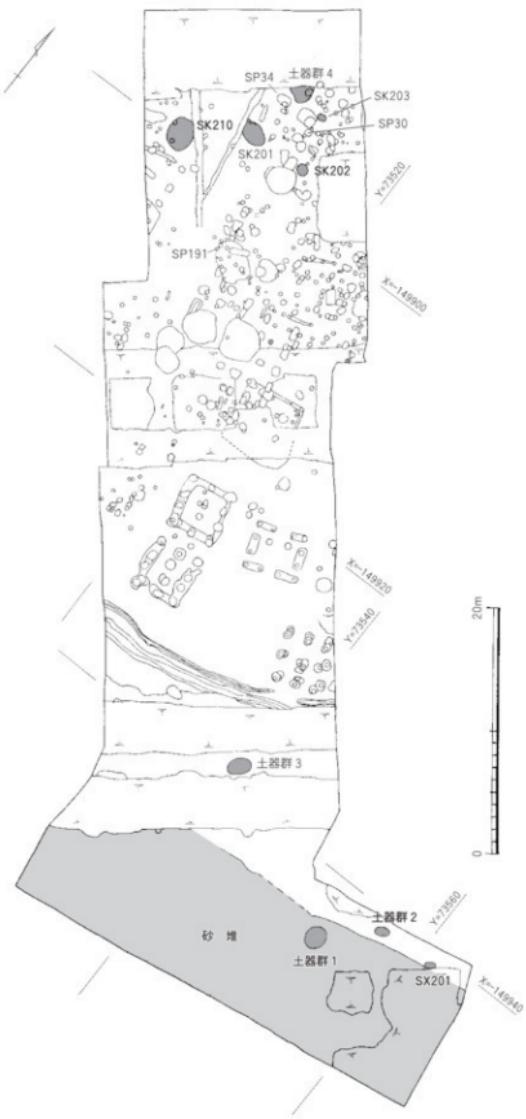
SK202は長径105cm、短径95cm、深さ5cmの楕円形の土坑である。埋土より、土錐や土師器脚付鉢の脚部（28）などが出土した。脚部はわずかに内湾し、4方向に円形透かしを施す。

SK203は長径80cm、短径60cm、深さ35cmの楕円形の土坑である。埋土より、完形の土師器脚付鉢（29）、小型鉢（30）が出土した。29は半球形の杯部を持ち、坏部外面は縦方向のミガキを施す。脚部は直線的に大きく開き、4方向に円形透かしを施す。30はわずかに内湾する口縁部を持ち、平底を持つ。外面はタタキ、内面はハケを施す。



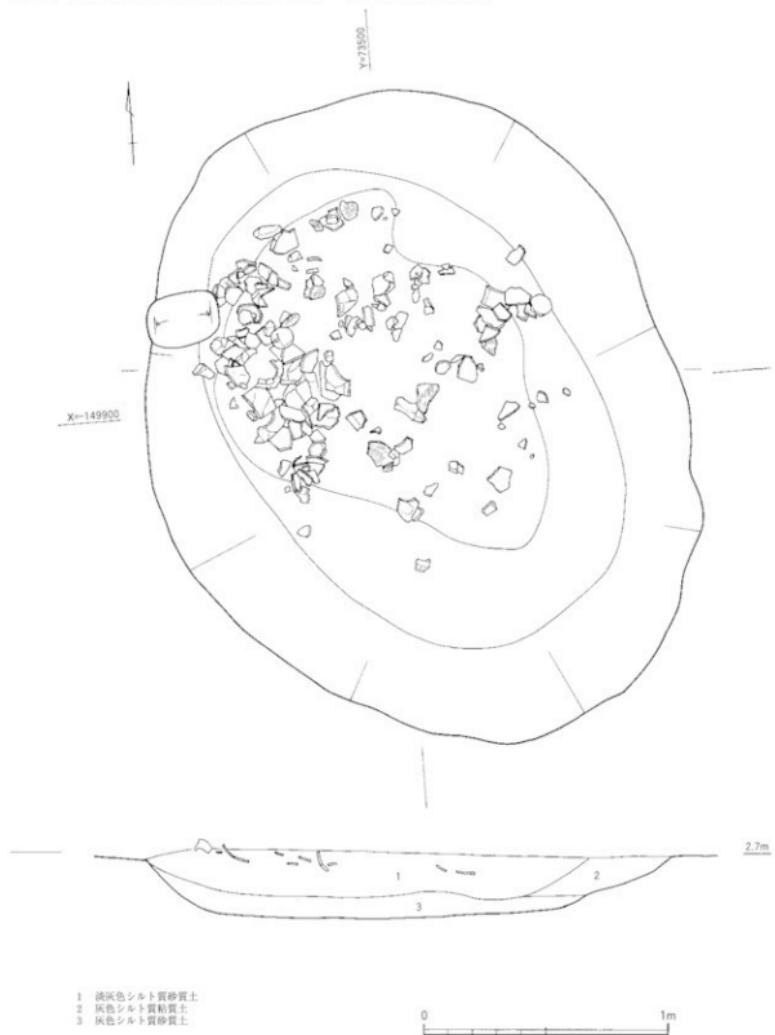
第22図 SK201平・断面図

第23図 SK202平・断面図



第25図 古墳時代前期の遺構分布図

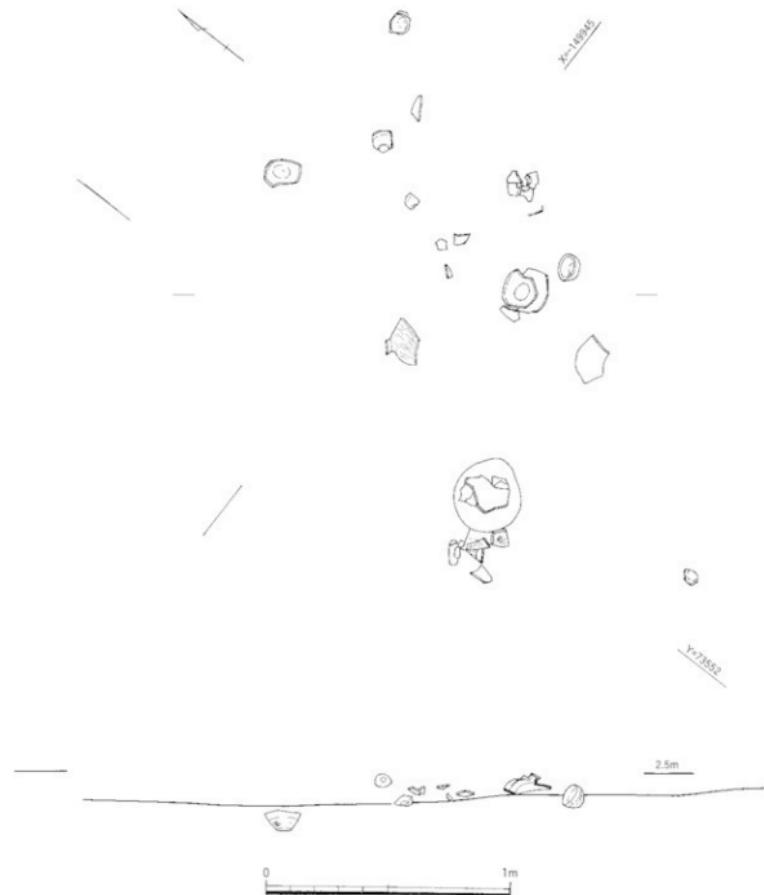
SK210は長径270cm、短径220cm、深さ25cmの楕円形の土坑である。土師器壺、壺、高杯等が出土した。31・32は土師器壺である。頭部から口縁部が緩やかに外反する。34は土師器壺である。頭部が直立し口縁部は強く屈曲する。胴部はやや扁平な球形である。35は土師器高杯である。杯体部より杯口縁部高が高く、杯体部内面は窪む。



第26図 SK210平・断面図

SX201は浜堤北端部に接する土壤化層で検出した土器の縦まりで、数点の土師器壺と土錘が出土した。56は、頸部屈曲部内面の下方にケズリによる稜が見られる壺である。58は球形の体部を持ち、口縁部は外方に強く屈曲する。

土器群1は3区中央部の浜堤上でまとめて検出した土器群である。土師器壺、甕、小型鉢、有孔鉢、台付鉢、小型高杯、土錘等が出土した。庄内式併行期新段階から布留式古段階に取まると考えられる。70は土師器壺である。口径16.6cm、器高36.0cmを測り、卵型の体部を持つ。口縁部はわずかに外反し、端部は面を持つ。



第27図 土器群1遺物出土状況平・断面図

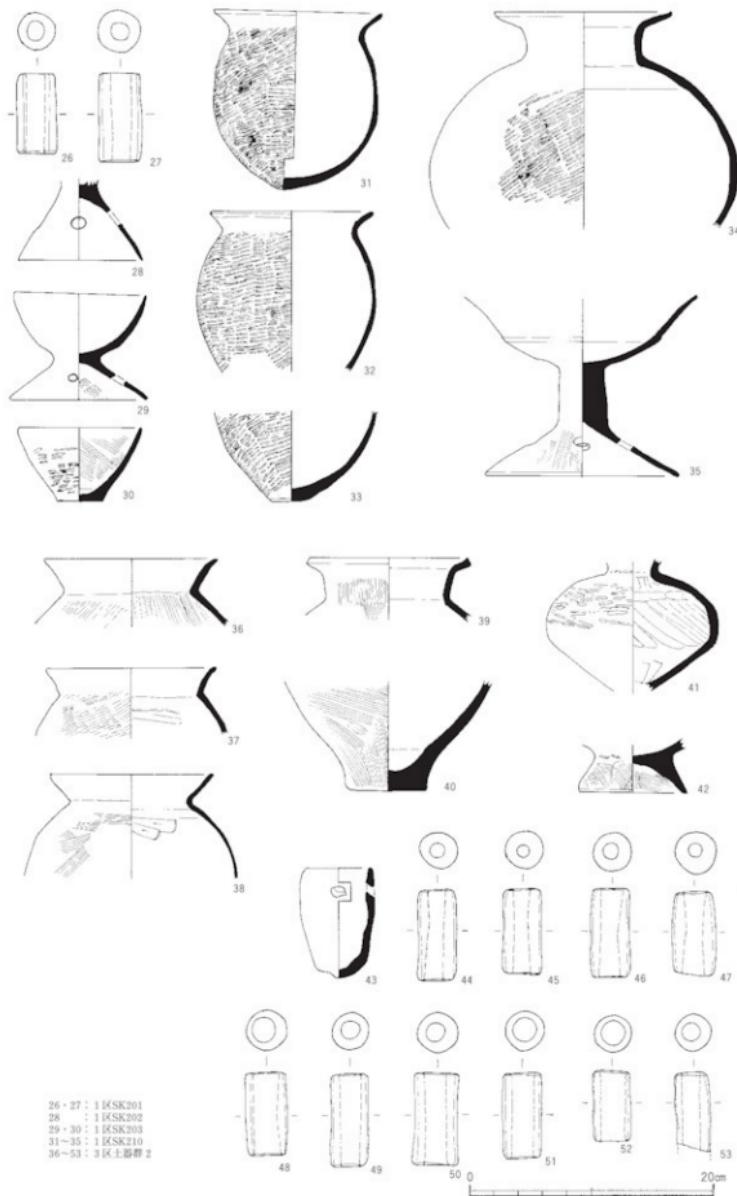
土器群2は3区東半部の浜堤と土壤化層の境界付近で検出した土器群である。土師器壺・壺・蛸壺の他に、土錘10点がまとまって出土した。36～38は土師器壺である。36・37の口縁部は「くの字」状に屈曲し外反するが、38は内湾して立ち上がり、頸部内面下方にケズリによる後が残る。39は土師器壺の口縁部である。

土器群3は2区南中央部の湿地状の落ち込みで検出した土器群である。土師器の細片がまとまって出土したが、遺存状況が悪く詳細は不明である。

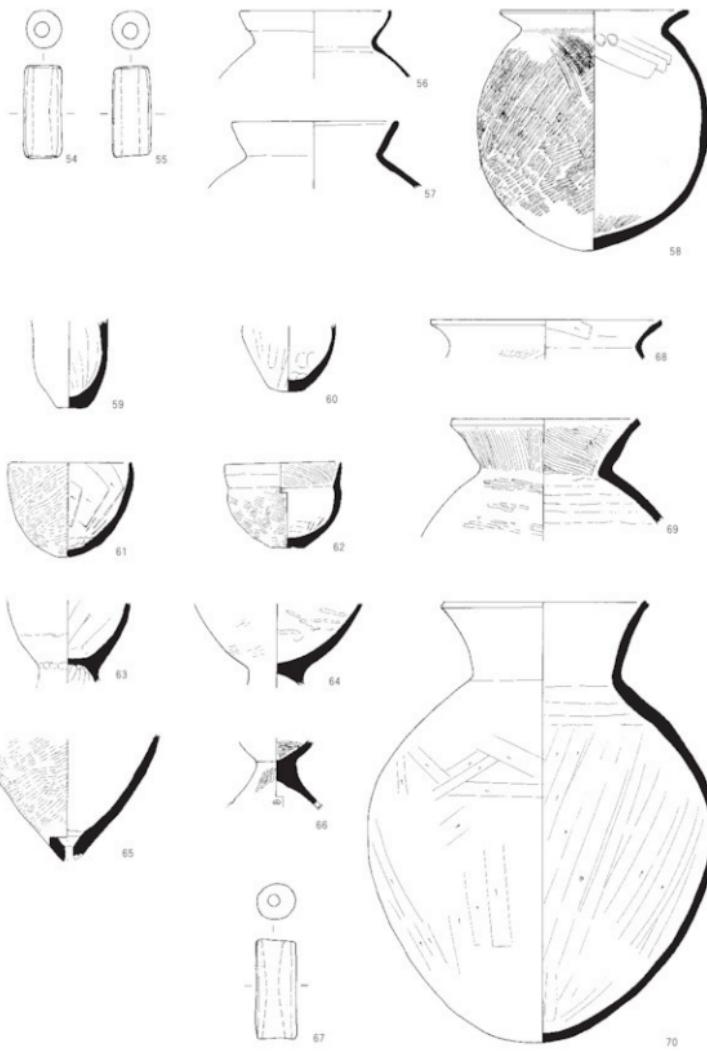
土器群4は1区北端部の浅い落ち込みで検出した土器群である。小型丸底壺・壺・蛸壺の他に、土錘7点が出土した。71は小型丸底壺である。半球状の体部に、わずかに外方に開く短い口縁部を持つ。



第28図 土器群2遺物出土状況平・断面図



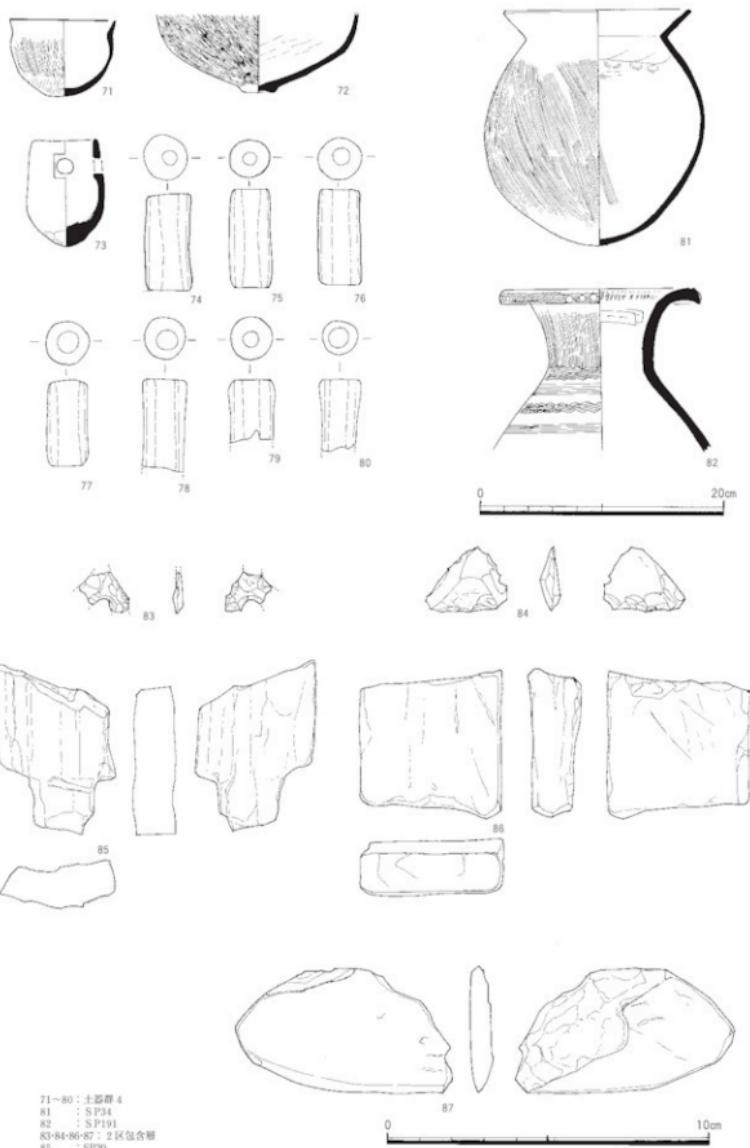
第29図 古墳時代前期の遺物実測図1



54~58 : 3区SX201  
59~70 : 3区土器群

0 20cm

第30図 古墳時代前期の遺物実測図2



第31図 古墳時代前期以前の遺物実測図

### その他の遺構出土遺物

81はSP34埋土から出土した土師器甕である。頭部内面屈曲部下方に、ケズリによる棱が残る。胴部は球形に近く、外面は斜め方向のハケを施す。82はSP191埋土から出土した弥生時代中期中葉の長頸壺の上半部である。肩部に櫛描の直線文と波状文を巡らす。弥生中期以前の土器は、他に確認できなかった。

### 石製品

83はサスカイト製凹基式石鎌である。84はサスカイト製削器である。85は緑泥片岩の半加工品である。86は砥石で、3面に使用痕が確認できる。87は両刃を持つ石製品で、石包丁の折損品の可能性がある。

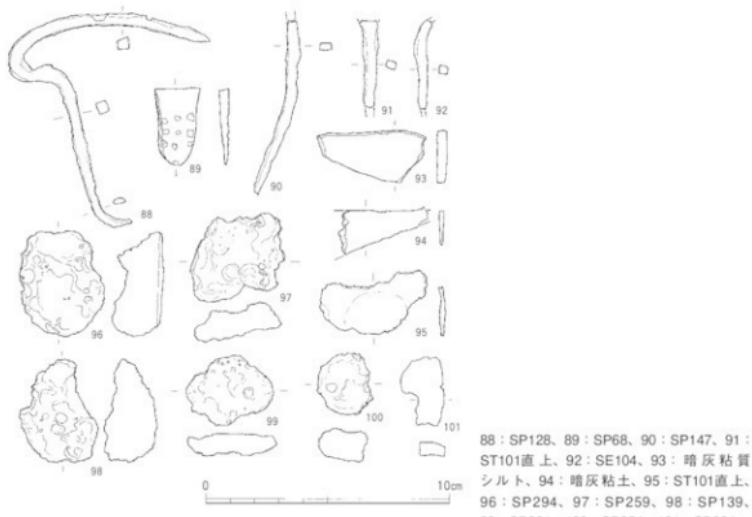
### 金属製品・金属製品製作関連遺物

88はSP128出土の棒状鉄製品で、断面が一辺5~6mmのほぼ正方形を呈し、両端を尖らせる。全体に大きく湾曲するが、製作時・使用時・使用後のどの段階で曲げられたか判然としない。89はSP68出土の楔である。全長は3.2cm、上端幅1.8cmを測る。表裏面には径2~3mmの突起が片面につき9個あり、滑り止め効果を狙ったものであろう。側面に木質が付着残存する。90~92は角釘である。頭部が欠損するが、いずれも頭巻釘と考えられる。

93は厚さ2.5mm程度の鉄板で、緩い楕形を呈する。96~100は鉢津（楕形津）で、いずれも鉄製品の製作に関連するものである。

### ウマ歯

写真図版19-2は、2区の第2遺構面検出時に出土したウマの上顎第1もしくは第2後臼歯である。歯冠のエナメル質と若干の象牙質が残存する。残存する歯冠高は61.9mmを測り、3~6歳程と推定されるが、歯根が欠損することを考慮すると、3~5歳と推定できる。



第32図 金属製品・金属製品製作関連遺物実測図

# 第3章 神戸市古川町遺跡にみられる砂礫浜海岸の堆積物とその古地形上の位置

増田富士雄（同志社大学理工学研究科）

佐藤喜英（株）平エンジニアリング

櫻井皆生（同志社大学理工学研究科）

伊藤有加（東京大学大学院新領域創成科学研究所）

## 1.はじめに

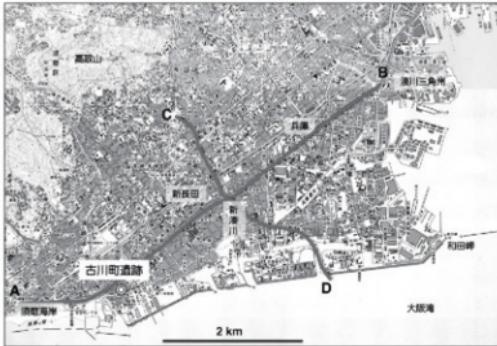
2011年6月と2012年9月、神戸市須磨区の古川町遺跡の発掘調査に際して出現した地層の観察を行った。地層の堆積相や堆積構造の解析や砂の粒度分析から、遺跡の基盤をなす地層は砂礫浜海岸の堆積物であり、海岸砂丘の堆積物を主体とすることが明らかになった。さらに、周辺地域の地下表層地質の解析から、和田岬を含む兵庫区から長田区や須磨区にかけての低地には、約5500年前までの海進期と最高海面期に砂嘴と渦が発達し、それが弥生時代前期までは残り、その後、沿岸漂砂による浜堤を伴う砂礫浜海岸が海側に広がっていったことがわかった。古川町遺跡は、現在の静岡県三保半島のようなその砂嘴の付け根に立地していたのである。

## 2.古川町遺跡の露頭と地層の解析法

古川町遺跡は、神戸市須磨区古川町2丁目に位置し（第33図）、その地表面の標高は3.6～3.8mの低地にある。この遺跡からは古墳時代初頭から中世に至る遺物が出土する。今回、観察した地層断面は、発掘調査地内で、北北西～南南東の方向に伸びた長さ約90m、高さ約2.5mの人工露頭である（第34図）。

地層の観察には、堆積相解析（増田、1988, 1989）を用いた。堆積相解析は、岩相、堆積構造、粒度特性、断面形態、重なり様式、側方変化などから、どのような場所で形成されたのかという“堆積環境”を推定する方法である。堆積物の粒度特性値は、露頭から採取した試料を風乾後、沈降式自動粒度分析機で分析し、得られた粒度分布からFork and Ward(1957)の方法で求めた。試料採取地点は第34図に示した。

表層地質は、関西圏地盤情報データベース（関西圏地盤情報ネットワーク・関西圏地盤情報協議会）を利用して解析した。解析範囲は、須磨海岸・和田岬・三宮を結んだ三角形の地域で、須磨区、長田区、兵庫区の沖



第33図 古川町遺跡の位置（地図は国土地理院発行2.5万分の1地形図「神戸首部」と「神戸南部」より作成。A-B, C-Dは第47図の地質断面の位置。）

積層が分布する低地帯である。この地域において、地質柱状断面図をさまざまな方向で多数作成し、この断面図に対してShazam層序学（増田ほか、2013）の解析方法を用いて、遺跡が立地する地盤状況を明らかにした。

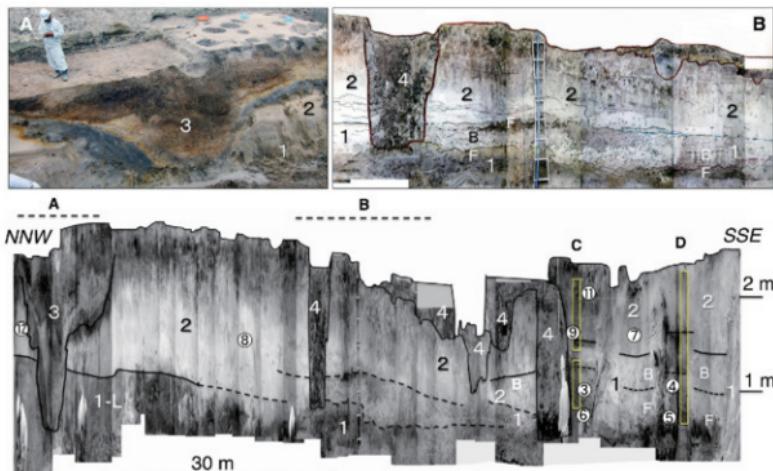
### 3.観察された地層と堆積物

古川町遺跡で観察された地層は、次の4つの堆積相に分けられる。1) 堆積相1（砂礫浜堆積物）：砂礫層と砂層の互層あるいは粗粒砂層と中粒砂層の互層、2) 堆積相2（砂丘堆積物）：分級の良い粗粒砂から細粒砂層、3) 堆積相3（流路埋積物）：土壌層を含む砂層と泥層、4) 堆積相4：人工改変土層。

**堆積相1（砂礫浜堆積物）：**厚さが80cm以上の砂礫層と砂層の互層で、露頭の最下部で見られる。下部ほど礫が多く層理が明瞭で、その単層の厚さは5～15cmである（第35図）。また、上部ほど砂勝ちで層理が不明瞭になる。砂層は中粒から粗粒で淘汰が良く、逆級化構造が発達する平行葉理が発達する（第36図）。礫は多くが1～3cmの中礫で、径10cmのものも混じる（第35図）。礫層も淘汰が良く、いわゆる“すかし礫”層になっているものもある（第37図）。礫の配列には南傾斜のインプリケーション構造がみられ（第35図、第38図）、互層自体も南側（海側）に5～8度で緩く傾く（第35図、第38図）。これらは海浜の前浜堆積物の特徴（増田・横川、1988；増田ほか、1994）を良く示している。上部で層理が不明瞭になり礫が混入する部分は（第39図）、ストーム時の大波で礫が運び込まれる後浜の堆積物の特徴を示している。インプリケーション構造や地層の傾斜方向から、これらの堆積物が南からの波浪で形成されたことがわかる。

**堆積相2（砂丘堆積物）：**分級（淘汰）の良い白色塊状の細粒から粗粒の砂層で（第39図、第40図）、厚さは80cm～2m。堆積相1（海浜堆積物）とは漸移してその上位に重なる。構成する砂の淘汰が非常に良いことが、この堆積相の特徴である。厚さ1cm以下のレンズ状の砂層を挟み、ちりめん縞状の構造をつくる（第41図、第42図）。これは現在の海浜の砂丘堆積物にも特徴的にみられる構造で、風成砂と雨などで流された砂とが緩い斜面で作りだされた構造である。また、この堆積相には砂丘斜面の痕跡と思われる高さ約12mの南傾斜の不明瞭な層理構造がみられる（第34図、第40図）。この構造から砂丘は海側に向かって前進していくことがわかる。この堆積相の上部には土壌化した部分、耕土や床土など人工改変された部分、植物の根痕や生物の巣穴などの活動痕（第43図）や、液状化した部分（第44図）などがみられる。

**堆積相3（流路埋積物）：**露頭の北側にみられる幅2～9mの谷状の構造を埋積した泥層や砂層や礫層で、一部土壌化している（第34図）。谷状構造は南北あるいは北東～南西に伸びている。谷状構造の基底が厚さ5～50cmほどの泥層でドレイブされており、谷底には流路底堆積物（ラグ堆積物）の礫が認められること、埋積物に洪水氾濫堆積物である粘土層から細粒砂層への逆グレーディング構造（増田・伊勢屋、1985）が認められることから、この谷状構造は河川の削り込みでつくられたことがわかる。泥層には生痕化石がみられるが、潮汐堆積構造は認められなかった。これはこの泥が洪水起源であり、しかも谷全体が浮遊泥をドレイブさせるような停滞水域を、一時、構成していたことを示している。さらに、埋積物のほとんどの部分を占める淘汰の悪い砂礫層には粘土礫が含まれ、河床にできるデューンの痕跡である斜交層理がみられないことから、當時水が流れているような通常の河川流路ではなかつたといえ



第34図 古川町遺跡の露頭断面

下図は連続写真から作成した断面で、縦を強調して表現している。A、Bは上の写真の部分。C、Dは四角部分は粒度分析試料の採取地点。丸付き数字は写真撮影地点で、図番号に対応。図中の数字1～4は堆積相に對応。図Bも縦を強調して表現している。



第35図 堆積相1の前浜（砾浜）堆積物  
礫の粒子配列に注目。写真右側が南。  
撮影地点は第34図中の③地点。  
写真内のスケールは長さ20cm。



第36図 堆積相1の前浜（砂浜）堆積物  
逆級化した平行葉理が特徴。撮影地点は第34図中の④地点。写真内のスケールは長さ20cm。

る。特に埋積物の上部では人工改変の痕跡が認められる。こうしたことから考えると、この流路は、北あるいは北東東の方向から越流した洪水流が砂丘間低地につくった氾濫流路の可能性が高い。海浜地形を河川の氾濫流が削り込んでできた谷状の地形を、初期には自然の流れが、その後は人間が土砂で埋積したものと考えられる。

堆積相4（人工改変土層）：堆積相1から堆積相3の上位を平坦化して遺構や遺物を多く含む地層が分布する。これらは表土、田畠の耕作土や床土、搅拌土などである。

堆積物の砂粒度特性：堆積相1（海浜堆積物）と堆積相2（砂丘堆積物）の砂の粒度分布について述べる。堆積相1は砂礫層や含礫砂層で、礫が含まれるが、そのマトリックスの砂（径2mm以下）について分析した。これらの全ての砂試料について共通する特徴は、すでに述べたように、分級が良い（分級度0.6以下）ことである（第45図）。また、歪度も多くは対称的で、やや正の領域にまで分布する（第45図）。砂の平均粒径との関係でみると、堆積相2（砂丘堆積物）は堆積相1（海浜堆積物）よりも細粒で、左右対称の分布を示す（第45図）。こうした砂の粒度特性は、神戸市東灘区北青木遺跡における弥生時代の前浜堆積物と砂丘堆積物との間で認められたもの（増田、1999）と同じである。

層序的には、堆積相2（砂丘堆積物）の砂は上部ほど細粒化し、対称度も正になる（第46図）。それはこの砂が海浜の砂から細粒部だけが風によって選択的に運ばれてきたものだからである。また、砂丘堆積物と海浜堆積物の下部（前浜堆積物）は後浜堆積物より、分級度が良く、粒径も小さい（第46図）。これは、後浜堆積物がストーム時に暴浪によってもたらされたものであることを反映している。この地域のように低い砂丘では、その堆積物の中に高潮や暴浪や津波などによって打ち上げられた細礫を含む粗粒な砂質堆積物が混入していると思われる。そのような薄い層が露頭で認められる（第34図、第40図）。

砂丘層の断面形態：堆積相2の砂丘堆積物は断面で観察すると、北側のものと南側のものに区別される（第34図）。層序学的には、北側のものは南側のものより下位に位置する。堆積相2は、見かけ上、堆積相1（海浜堆積物）と漸移を示すが、堆積的には時間のギャップがある。堆積物の供給量が増えたり、海面が低下したりして、海岸線が沖側に前進すると、前浜堆積物（堆積相1の下部）の上に、後浜堆積物（堆積相1の上位）が重なり、その後に砂丘堆積物（堆積相2）が重なる。この露頭でみられる地層は、海岸線が沖側に前進した結果、こうして形成されたものである。別の言い方をすれば、北側に砂丘が作られていた時期には、南側には海浜が広がっていたのである。

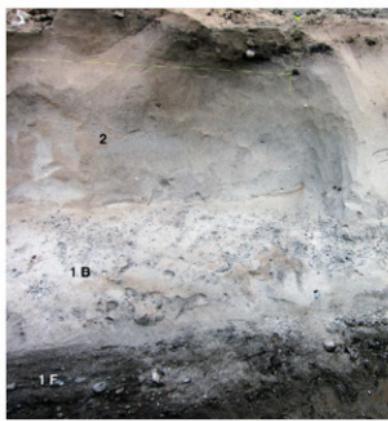
堆積相1と堆積相2の境界、すなわち、砂丘と海浜堆積物との境界は、北部から中央部にかけて南側に低下し、中央部ではもう一度その上位に境界が重なって形成され、さらに南部ではやや高くなっている（第34図）。すなわち、中央部では、北側や南側で認められるような、海浜の前浜堆積物の上位に後浜堆積物、さらにその上位に砂丘堆積物が重なるという典型的な海岸堆積物の層序（第40図、第42図、第46図）がみられない。中央部では、砂丘内の高い部分にまで、波浪で打ち上げられた細礫層が認められ、砂丘や後浜や前浜の堆積物が2～3層、段を作ったり南傾斜の侵食面を作ったりして重なっている（第34図）。このことは、海面が低下しながら北側の砂丘が形成され、その後、海面が数10cmから1m弱上昇し、形成していた砂丘の海側部分が侵食され、その後、南側に新しく海浜と砂丘が形成されたことを示している。南側の砂丘堆積物には弥生時代の遺物が認められることから、北側の砂丘堆積物はそれ以前のものといえる。堆積相1と堆積相2の境界の標高（後浜頂部の標高）が、北側では1.4から0.9mへ



第37図 堆積相1の前浜堆積物  
マトリックスがないしかし礫層が特徴。撮影地点は第34図中の⑤地点。写真内のスケールは長さ6cm。



第38図 堆積相1の前浜堆積物  
礫のインブリケーション構造が特徴。写真右側が南。撮影地点は第34図中の⑥地点。写真内のスケールは長さ20cm。



第39図 堆積相1と堆積相2の重なり  
1Fは前浜堆積物の砂礫層。1Bは後浜堆積物の含礫砂層。  
2は砂丘堆積物の淘汰の良い粗～細粒砂層。  
典型的な海岸堆積物の層序を示す。撮影地点は第34図中の⑦地点付近。  
写真的高さは約1.8m。



第40図 堆積相2（砂丘堆積物）  
1は堆積相1の海浜堆積物。2は堆積相2の砂丘堆積物。  
4は砂丘堆積物の上位の人工改変土層。堆積相2中に認められる右（南）下がりの構造に注目。  
撮影地点は第34図中の⑧地点付近。写真的高さは約1.8m。

と低下し、南側では1.1から1.4mへと上昇している。後浜頂部の標高は暴浪時の波の週上限界地点の高さであるから、現在の神戸港の平均海面（標高-0.9m）から考えると、当時の海面はやや高かったこと、両者の間での海面は現在の海面高ほどに低下したといえる。また、ここで見いだされた海面低下とその後の海面上昇という現象は、神戸市東灘区小路大町遺跡の地層から見いだされた海面変動（増田、2004）と同じ出来事だと考えている。

以上の結果から、遺跡の基盤は砂礫海浜とその上に重なる砂丘の堆積物であり、それらが人工改変されて遺跡が立地したことを見出している。神戸地域で、堆積構造から海浜堆積物が認定されたのは、北青木遺跡（増田、1999）について2例目である。その年代がさらに細かく特定できれば、過去の海水準変動を明らかにする研究の貴重なデータとなろう。

#### 4. 遺跡の基盤となった砂嘴の形態

古川町遺跡の基盤を構成している砂礫海浜と砂丘の堆積物が、どのような堆積システムから構成されているか、地下地質から推定してみる。遺跡の西側の須磨から東方の和田岬、さらに北東の三宮にかけての地域について地下表層地質を調べた結果、次のようなことが分かった。

長田疊層：古川町遺跡の最下部の砂礫海浜堆積物は、さらに下位に連続し、厚さ2～5mの砂礫層として分布する。その下位には厚さ5m程の砂層がみられる（第47図）。この砂礫層は長田疊層と呼ばれ、疊浜の堆積物とされている（関西地盤情報活用協議会地盤研究委員会、1988）。その分布を調べると、西は須磨海岸から東は和田岬へと伸び、また、北東の湊川の河川三角州に向かっても伸びている（第48図）。

和田岬への浜堤：遺跡のある古川町から東方へと、埋め立て前の旧汀線に沿って伸びる浜堤の高まりは、主に砂礫層から構成され、和田岬付近で細く伸びた砂嘴を構成していた堆積物であるとされている（宇多ほか、2000）。確かに、1885年（明治18年）作成の地形図をみると、和田岬が海に突き出た砂嘴状の地形を示していて、そこには河川が流入していないことから、それは三角州ではなく、沿岸流によって西から運ばれた土砂が東に砂嘴状の浜をつくっていたことがわかる。ちなみに河川三角州は、和田岬の北方の湊川がつくるような丸や三角に海に向かって突き出た形になる（第48図）。須磨から和田岬に伸びる砂礫層の頂部標高は0.5～1.5mである（第48図のII）。現在の我が国の砂嘴（砂州）の頂部標高はほぼ一定であり、それは後浜の頂部標高に近いことが知られている（武田、2007）から、須磨から和田岬に伸びる浜堤海岸と砂嘴は現在の海面高度に近い場でできた可能性が高いことがわかる。

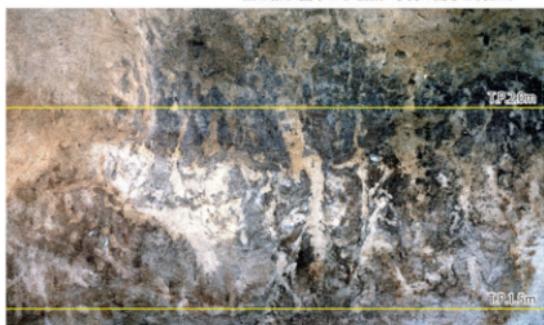
最高海面期の砂嘴：一方、調査地から北東へ、現在の阪神高速三号神戸線に沿って伸びる砂礫層は、その頂部標高が2～4mでやや高い（第47図のI）。さらに須磨から和田岬へ分布する低い砂礫層とこの高い砂礫層との間に、細長い低所と頂部標高が0.5～3mの漸移部分がみられる。これらの砂礫層の分布は、山地からの河川との関係が認められないし、高い頂部標高の砂礫層は、海側が平滑で陸側がぎざぎざして西側に巻き込むように分布する（第48図）など、これらが鉤状砂嘴あるいは複合砂嘴（武田、2007）を形作っていたことを示している。さらに陸側に潟堆積物と思われる泥層（長田泥層：関西地盤情報活用協議会地盤研究委員会、1988）が分布していること、その泥層が大阪湾の内湾泥底堆積物である第13海成粘土層（Ma13層）と連続している可能性が高いこと（第47図）など、この砂礫層が陸側に潟をもった砂嘴堆積物であることを強く示している。その潟堆積物（長田泥層）には、泥干潟の特徴である蛇行した



第41図 堆積相2(砂丘堆積物)にみられるちりめん構造の構造  
砂丘堆積物に特有の構造である。撮影地点は第34図中の⑨地点。写真内のスケールは長さ20cm。



第42図 堆積相1と堆積相2の重なり  
1は海浜堆積物の砂礫層、2は砂丘堆積物の淘汰の良い粗～細粒砂層。1の上部は葉理が不明瞭な後浜堆積物、2はちりめん構造の構造がみられる砂丘堆積物、4は人工改変土層。撮影地点は第34図中のC地点。写真的高さは約2m。



第43図 堆積相2の上部にみられる生痕  
砂丘堆積物の上位から人工改変土層にみられる根痕や巣穴の痕跡。その一部は液状化して変形していると思われる。撮影地点は第34図中の⑩地点。

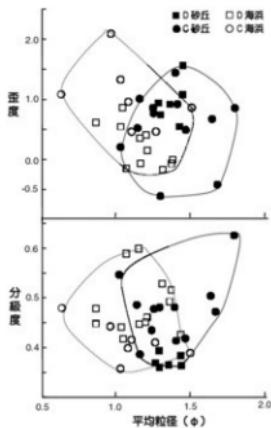


第44図 堆積相2にみられる  
液状化による変形  
砂丘堆積物の中の砂層が  
液状化して破壊、変形して  
いる。液状化は地震動で起  
ることが多い。撮影地点  
は第34図中の⑪地点。写真  
の横幅は約75cm。

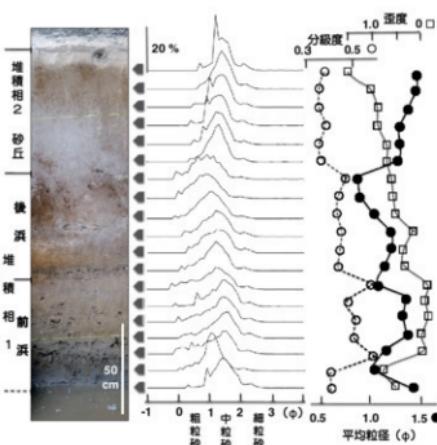
澗（Tidal creeks, Tidal channels）と思われる流路跡が、長田区若松町東遺跡の調査で見だされており（神戸市教育委員会、2013）、砂嘴と澗の存在を示唆している。それが存在した時代が繩文時代晚期から弥生時代前期であるから、下位に連続して存在する泥層は、さらに古い時代の堆積物であり、砂嘴は海進期から最高海面期に発達する地形であると言われる（増田、1992；Reading,1996；増田ほか、2013）ことに矛盾しない。この地域では、弥生時代前期まで澗が残っており、そこに大阪湾の潮汐の影響が及んでいたといえる。

砂嘴を形成する砂礫層は、西側の垂水から須磨地域の古い地層からなる海食崖からもたらされたものである。この砂礫層は、頂部標高が高いことから、約6000年前から5000年前、海水準が現在よりも約2～3 m高かった最高海面期の大坂湾（Masuda et al.,2002）の和田岬地域に形成された砂嘴堆積物で、陸側に存在した砂嘴の残骸である。

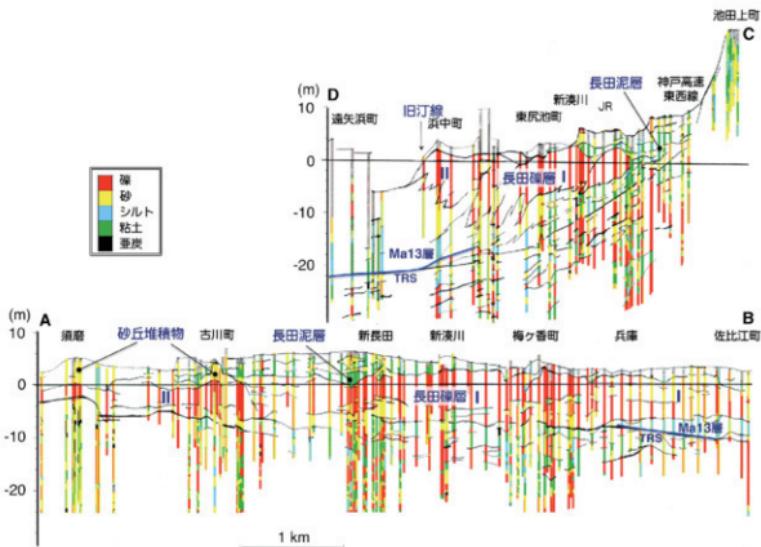
砂礫層の分布から推定すると、最高海面期の砂嘴は、現在の静岡県三保半島の砂嘴地形（門村、1966；宇多、1997）とはほぼ同じ大きさで、形も似ていたことがわかる（第48図）。この大きな砂嘴は、海進に伴って出現した海食崖がつくりだしたもので、西側の海食崖は当時、現在よりもさらに南に出っ張っていたことが波食台や波食棚の存在からわかる。そのため、砂嘴全体の伸びの方向も北東によっていたと思われる。そしてその後、4500年前頃からこの地域の南岸の埋め立てが行われる戦前までは、海面がやや低下する過程で海食崖への作用が小さくなることで、堆積物供給が少なくなってきたのである。この過程で最高海面期の大きな砂嘴の海側に、浜堤を伴う砂礫浜海岸が、須磨から和田岬付近に発達した。すなわち、従来考えられていたのとは違って、最高海面期までに発達した砂嘴は、現在の内陸部に大きく広がり、その陸側には弥生時代前期まで澗が分布していたのである。砂嘴と澗という堆積システムがこの地域の表層地質をつくっているのだ。澗は、海面低下と人間活動による土砂供給が多くなった弥生時代以降に前進した湊川三角州によって湾口を閉鎖され、背後の山地からの土砂供給で急激に埋積され消滅したと思われる。古川町遺跡はこの大きな砂嘴の付け根に位置し、その後の砂丘を伴った砂礫浜海岸に立地したの



第45図 堆積物の砂の粒度特性  
海浜堆積物（堆積相1）と砂丘  
堆積物（堆積相2）の特徴がみ  
られる。

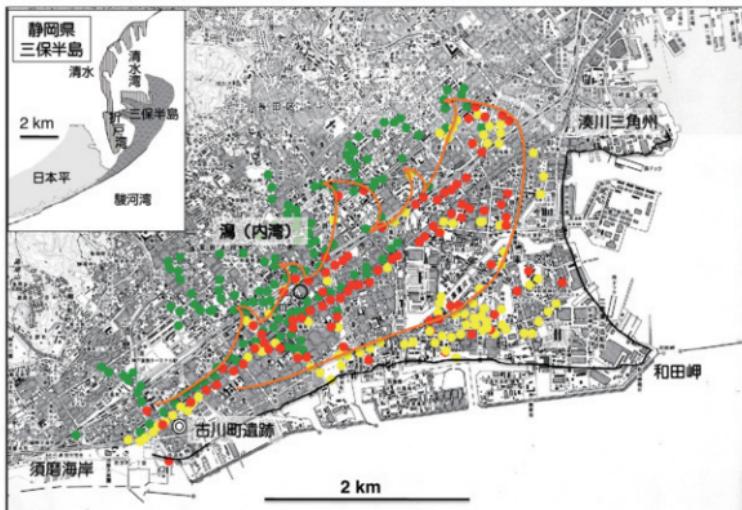


第46図 砂の粒度特性の垂直変化  
典型的な海浜堆積物の重なりを示す地点D（第34図を参照）における砂の粒度特性の変化。堆積相毎に粒度特性が異なるのがわかる。



第47図 表層地質断面

断面の位置は第33図に表示。A-B断面では北東に向かって長田砂層が砂質になる。C-D断面では長田砂層が長田泥層の間にくさび状に入り込んで分布する。内浜泥底堆積物の海成粘土層 (Ma13層) が長田泥層に連続する。



第48図 和田岬地域の砂嘴と潟の堆積物の分布

古川町遺跡は現在の静岡県三保半島のような砂嘴の付け根に位置していた。Iは最高海面期の砂嘴、IIはその後の砂嘴浜海岸と和田岬の砂嘴。

である。

謝辞：調査の機会を与えていたいた神戸市教育委員会の丸山潔・千種浩・山口英正氏に感謝します。また、表層地質の解析に用いた地盤情報データベースの利用許可を頂いた関西圏地盤情報データベース運営機構に謝意を表します。

## 文 献

- Fork, R.L. and Ward, W., 1957, cm razos river bar: a study in the significance of grain size parameters. *Journal of Sedimentary Petrology*, 31, 514-529.
- 門村 浩、1966、静清地域の軟弱地盤とそれに基因する灾害の予測（1）。地学雑誌、75、226-248。
- 関西地盤情報活用協議会地盤研究委員会、1988、新関西地盤、神戸および阪神間。関西地盤情報活用協議会、270p。
- 神戸市教育委員会、2013、若松町東遺跡第1・2・3・4・5・6次発掘調査報告書。44p。
- 増田富士雄、1988、1989、ダイナミック地層学-古東京湾域の堆積相解析から-「その1基礎編」、「その2発展編」。応用地質、29, 312-321；30, 29-40。
- 増田富士雄、1992、古東京湾のパリーア島。地質ニュース、458、16-27。
- 増田富士雄、1999、北青木遺跡の海浜堆植物。北青木遺跡発掘調査報告書—第3次調査、IV、66-74、神戸市教育委員会、148p。
- 増田富士雄、2004、神戸市東灘区小路大町遺跡で観察された古噴時代の潮汐堆植物。小路大町遺跡第4次調査発掘調査報告書、神戸市教育委員会、V、63-70。
- Masuda, F., Irizuki, T., Fujiwara, O., Miyahara, B. and Yoshikawa, S., 2002, A Holocene sea-level curve constructed from a single core at Osaka, Japan (A preliminary note) . *Memoirs of Faculty of Science, Kyoto University Series of Geology & Mineralogy*, 59, 1-8.
- 増田富士雄・伊勢屋ふじこ、1985、「逆グレーディング構造」：自然堤防帶における氾濫原洪水堆植物の示相堆積構造。堆積学研究会報、22／23、108-116。
- 増田富士雄・岡崎浩子・横川美和・村越直美・酒井哲弥、1994、更新統の海浜堆植物に対するMINI-SEQUENCE STRATIGRAPHY。地質学論集、45、101-109。
- 増田富士雄・佐藤智之・伊藤有加・櫻井皆生、2013、Shazam層序学をボーリングデータベース解析へ適用する試み：大阪平野の表層地質研究を例に。地学雑誌、印刷中。
- 増田富士雄・横川美和、1988、地層の海浜堆植物から読み取れるもの。月刊地球、10、523-530。
- Reading, H.G., 1996, *Sedimentary Environments: Processes, Facies and Stratigraphy*. Blackwell Science, Berlin, 688p.
- 武田一郎、2007、砂州地形に関する用語と湾口砂州の形成プロセス。京都教育大学紀要、111、79-89。
- 宇多高明、1997、日本の海岸侵食。山海堂、442p。
- 宇多高明・西原在浩・加三千宜、2000、大阪湾に面した神戸市和田岬の形成機構に関する一考察。地形、21, 329-340。

## 第4章　まとめ

今回の調査では、発掘調査成果と合わせ下層の地質調査を実施し、海浜部の土地形成過程と、居住域や耕作地などの土地利用の変遷について考える上で重要な成果を得た。調査地全域が数列の浜堤及びその後背地上に立地していることが確認されたことにより、市域西部の海浜部の形成過程の一端が明らかになった。今回の調査成果から、妙法寺川河口付近の土地利用の変遷をまとめてみたい。

古川町遺跡は、弥生時代以降に形成された砂丘を伴った砂礫浜海岸に立地している。今回の調査でも、弥生時代中期の土器と石器が数点確認されているが、明確に土地利用の痕跡が見られるのは古墳時代前期（庄内式新段階から布留式初頭）である。3区の浜堤上の土器群や1区の土坑や土器群から、当期の遺物が出土している。遺構分布と浜堤上面の土壤観察から、2区南端部より北側で浜堤上面の土壤化が進行し、居住域としての利用が始まったと考えられる。古墳時代中期から後期の様相は、遺物の出土がほとんど無いため不明である。遺構の形状から、カマドを持つ方形堅穴建物1棟の他、SB202をはじめとする掘立柱建物の一部が当時期に属すると考えられる。後述する大壁造り建物についても、当時期から飛鳥時代の遺構である可能性が高い。当遺跡の北側に隣接する鷹取町遺跡では、古墳時代後期の堅穴建物群が検出されており、当期の集落の中心は、調査区北側に存在すると考えられる。

律令期になると、調査地の北側900m付近を東西に通る旧山陽道が整備され、大田町遺跡では須磨駅家と比定されている建物群が検出されている。古川町遺跡では、調査区北半部を中心に、奈良時代後半から平安時代にかけての遺物が大量に出土し、当遺跡が安定した居住域として利用されていたと考えられる。特に平安時代後半の遺物が大半を占め、遺構としては井戸と木棺墓を検出しておらず、出土遺物の制約により峻別は困難であったが、掘立柱建物の多くも、当時期に属すると考えられる。平安時代後半には、主要道から離れた海浜部においても安定した集落が形成されたことを示している点で重要である。

中世以降、土地利用に大きな変化が見られ、生産域としての利用が始まる。調査地南端部を除いて、耕起痕や耕作土の広がりが見られ、近世に至るまで井戸以外の遺構は見られない。耕作地造成による削平と長期にわたる耕作により、前時代までの遺物包含層が攪乱され、耕作土からは各時代の遺物が混在して検出された。

近世以降、浜堤のまま露出していた調査区南端部分においても、土地利用の変化が見られる。保水性のない土壤に、粘土を用いた貼床を行い、海岸側へ耕作地を拡大している。防砂林の痕跡と考えられる生痕が検出されたラインから、南側のみ南北方向の畦畔の列が見られるところから、土壤化が進んだ北側と新たに造成した南側で、異なる耕作が行われていた可能性がある。

### 大壁造り建物について

2区で通常の掘立柱建物と異なる柱掘形を持つ建物を3棟検出した。長方形の平面形の掘形に2本の柱を据える建物（SB203）と、外周する柱掘形が浅い溝状で、柱埋置部分をさらに掘り下げる建物（SB204・SB205）がある。大壁造り建物と呼ばれる工法と似ており、一般的には、溝状の掘形に狭い間隔で柱や杭を立て並べて、土壁の支持材とする工法で建てられたと考えられている<sup>(1)</sup>。大壁造り建物は滋賀県、奈良県、大阪府等、近畿地方を中心で分布しており、古墳時代中期から飛鳥時代にかけて類例が見られ、渡来系集団との関連が指摘されてい

る<sup>(2)</sup>。市内では、寒鳳遺跡<sup>(3)</sup>（6世紀中葉）、上沢遺跡（6世紀後半）<sup>(4)</sup>、二宮遺跡（7世紀初頭）<sup>(5)</sup>で同様の建物が検出されている。

古川町遺跡で検出したSB203の工法は、二宮遺跡第1次調査で検出されたA区SB303やB区SB304と共に、近接する柱の設置に際し、掘削作業効率を高める手法と考えられる。SB204・SB205においても、複数の柱を同一掘形に建てる工法が見られる。また、SB204・SB205は、溝を巡らすという大壁造り建物の工法との共通点がある。しかし、当遺跡で検出された3棟の建物はいずれも小規模であり、柱間に柱や杭の痕跡がみられない点で、一般的な大壁造り建物とは異なる。

外周する浅い溝については、壁の支持に対する効果ではなく、壁下端部を地表の一段下に設けることにより、壁下端部の安定と隙間を防ぐ効果を考えた工法と考えられる。また、外周する溝が後世の削平により失われた場合、通常の掘立柱建物との鑑別が困難であり、SB203を含め他の掘立柱建物も同様の工法が取られていた可能性がある。

SB203・SB204・SB205は、掘形の埋土にも特徴が見られる。異なる土壤を丁寧に転圧して柱を固定しており、今回の調査で検出した他の柱穴では見られない手法である。

以上のように3棟の建物は、一般的な大壁造り住居とは異なるが、他の建物の工法と異なる特徴を持ち、今回の調査でも特異な建物として位置づけられる。出土遺物がなく、時期の特定や他の建物との関連などの課題が解決できないが、周辺調査の進捗と類例の増加によって当遺跡の性格を再検討したい。

#### 参考文献

- (1) 林 博通 「大壁造り建物」の発見・経緯・問題点『穴太遺跡発掘調査報告書』1997 滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会  
(2) 花田勝広 「渡来人の集落と墓城」「考古学研究」第39巻第4号 1993 他  
(3) 西岡誠司 「寒鳳遺跡第2次調査」「平成8年度神戸市埋蔵文化財年報」1999 神戸市教育委員会  
(4) 池田 稔 「上沢遺跡第9次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」2000 神戸市教育委員会  
(5) 谷 正俊 「上沢遺跡第10次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」2001 神戸市教育委員会  
(6) 谷 正俊 「上沢遺跡第32次・1・2調査」「平成15年度神戸市埋蔵文化財年報」2006 神戸市教育委員会  
(7) 谷 正俊 「二宮遺跡第1次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」2006 神戸市教育委員会



1. 1区 全景（南東から）



2. 1区 全景（北から）

写真図版2



1. 1区 全景（東から）



2. 1区 ST101（東から）



1. 1区 SK202 (北から)



2. 1区 SK210 (南東から)

写真図版4



1. 1区 SK201 (南から)



2. 1区 SK203 (北から)



1.2区 全景（北西から）



2.2区 全景（西から）

写真図版6



1.1・2区 全景（南東から）



1. 2区北半部（南から）



2. 2区 SB202（北から）

写真図版8



1. 2区 SB203 (北から)



2. 2区 SB203柱痕検出状況 (南西から)



1. 2区 SB204・205（北から）



2. 2区 SB204掘形櫛出土状況（南西から）

写真図版10



1. 2区南 全景（北東から）



2. 2区南 全景（南西から）



3. 2区南 湿地内遺物出土状況（南西から）



1.3区 第1面全景（東から）



2.3区 砂堆北端部（西から）

写真図版12



1. 3区 第2面全景(南東から)



2. 3区 東半部(南東から)



1. 3区 浜堤上出土遺物(北西から)



2. 3区 浜堤北端部出土遺物(南から)

写真図版14



1



4



2



5



3



6



7



8

1. 1区ST101出土遺物

1：掘形直上 2～8：棺内



9



10

2. 1区SX102出土遺物



1. 1区土器群2出土遺物



2. 1区中世耕土出土遺物

写真図版16





41

土器群2



43

土器群2



61

土器群1



70

土器群1



58

SX201  
3区 遺構出土遺物



32

SK210

写真図版18



1. 銀壺



2. 土錘



1. 石製品

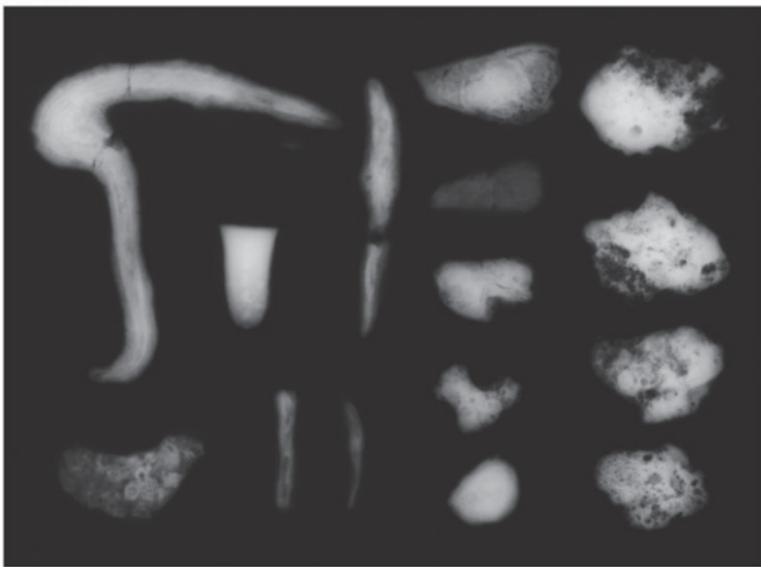


2. 2区出土ウマ歯

写真図版20



1. 鉄製品



2. 鉄製品X線透過写真

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふるかわちょういせきだい2じはくつちょうさほうこくしょ				
書名	古川町遺跡第2次発掘調査報告書				
副書名					
巻次数					
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	山口 英正（編）・阿部功・中村大介・増田富士雄・佐藤喜英・櫻井皆生・伊藤有加				
編集機関	神戸市教育委員会				
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 Tel.078-322-6480				
発行年	西暦 2014年3月31日				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北 緯	東 経
ふるかわちょういせき 古川町遺跡	ひょうごけんこうべし 兵庫県神戸市 すまく ごでらちょう 須磨区小寺町3 丁目1番	28107	7-36	34度 38分 45秒	135度 8分 7秒
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古川町遺跡	集落跡	古墳時代～近世	浜堤、掘立柱建物、大壁建物、竪穴建物、井戸	弥生土器・土師器・須恵器・白磁	
要 約					
古墳時代前期～近世の遺構、遺物を確認した。浜堤上に形成された遺跡で、古墳時代以降集落が形成され、神戸の海浜部の土地利用の変化を示す資料を得た。					

---

### 古川町遺跡第2次発掘調査報告書

2014.3.31

発 行 神戸市教育委員会文化財課

〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078-322-6480

印 刷 株式会社 明新社

〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地